

霧島悠斗は勇者？である

s-k

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は化物となった。

大切な人を守るために少年はその身を捧げる。

少女達は想う。

少年の事を大切にそして愛おしく。

これは少年少女が繋げる物語

目次

プロローグ	1
日常	11
初めての戦い	18
休み	27
昔話	36
無意識	42
ひとときの安らぎ	51
災害	59
亀裂	69
決戦	76
暴走	83
告白	91

プロローグ

7月30日

徳島県徳島市の街を朝早くから走る一人の少年がいた。

その少年は黒いフードを被り、黒いジャージを身に纏い、街を一周していく。

「ふう」

走り終わるとフードを取り、素顔が晒される。

銀髪の髪に銀色の目。

普通ではあり得なさそうな髪や目をしている少年、『霧島悠斗』が近くのベンチで休んでいた。

「…帰ろ」

一人で朝早くから走り、日が昇り始めた為家に戻る。

悠斗の家はそこまで大きくない一般的な家庭であり妹が一人いた。時刻は既に6時を回っており、霧島家は早起きのため全員が起きてた。

「おかえりーお兄ちゃん」

「ただいま。ノノ」

可愛いクマのパジャマで出てきたのは妹の『霧島ノノ』。悠斗の二つ下で小学三年生。

「悠斗ー？早くシャワー浴びてきなさいー」

「分かったーすぐ入る」

悠斗は脱衣室に向かっていく。

その間に母の『霧島裕美子』は朝ごはんの支度を済ませる。父は若くして他界しており、普段はこの三人で過ごしていた。

これがいつもの日常。変わらない日常。

そんな日常がこの日、終わりを告げる。

その日の夜。

いつも通り、悠斗は練習をしていた。

何の練習かと言うと…

「はあー！ふっ！たあっ！」

空手や柔道といった武道の練習をしていた。

それを見ているのは母である裕美子とノノが怪我をしないように監視をしていた。

悠斗は霧島家にある武術を全部習っており、その種目は多く剣道、柔道、空手、薙刀、居合、e t c…。

とにかく沢山の武術を習い、そのほとんどをマスターし始めていた。

「悠斗、もう十時になるからそろそろ…」

「あ、うん。分かったよ」

裕美子に言われ終わりの時間である十時になっていた。

この後はもう寝るだけだが、この日はそうはいかなかった。

ゴゴゴゴゴッ！

「つと、また地震かしら？」

「最近多いね〜」

「でも強くなかった？」

激しく揺れた地面。

ここ数日ではあまりにも多い地震。

ただいつもとは違い、鳥や犬が騒ぎ出していた。

「何だ？」

刹那

空から何かが降ってきた。

三人は急いで外に出るとそこには見たこともない白い化物が人を喰らっていた。

その姿は虫にしては巨大で鳥にしては羽はないなんとも言えないような形をしており、人を喰らっているため口周りは血で染まっていた。

そして食べ終わるとこちらと目があつた。

「逃げるよ!!!」

「きゃあああああああ!!」

何処からか女性の叫び声が聞こえてくる。

しかし、それには構ってられない程に悠斗達も余裕が無かった。

先程空から落ちてきた白い化物は人を喰らう。それも建物に逃げ

ても壊して強引に喰らっていくからだ。

「二人ともこっちに！」

裕美子の誘導の下に外へ逃げて避難場所に向かう。後ろを見ると、そこにあつたはずの霧島家の家が無くなっていた。

「お母さん！家が……！」

「待っててノノ！もうちょっとしたら休憩できるからね！」

二人の手を引っ張りながら避難場所の学校へと向かって走る。

しかし……

「きゃっ!!」

「ッ！ノノッ！」

ノノが転び、裕美子の手から離れる。

そこへ化物達がノノを喰らいにやってくる。

「やめろおおおおお!!」

悠斗は走った。

裕美子の手を振り払い、ノノの下へと走っていく。そしてノノを掴み投げ飛ばす。

「きゃー！」

ノノは多少血を流しているが、無事だった。

「お兄ちゃんッ!!」

グシヤッ!!

「ああああああああ!!!」

悠斗の叫び声が響き渡る。

「お兄ちゃんツ!!」

「悠斗!!」

悠斗は右腕と右脚が無くなっていた。

噛み千切られた場所からは血が大量に流れていて、とても助からないだろう。

「嫌だよ！死なないでよお兄ちゃん!!」

「そうよ悠斗！母さん置いていくなんて許さないわよ！」

二人は涙で顔がクシャクシャだった。

しかしそれでも悠斗は助からないだろう。

仮に助かったとしても、義手義足の生活になり今までの生活には戻れないだろう。

そこへ化物が迫ってきた。

「ツ!!」

「かあ…さん、の、の……にげ…!」

悠斗が二人の体を左半身だけで突き飛ばす。

「ツ！悠斗オオ!!」

瞬間、悠斗の体は化物に飲み込まれた。

気がつくところそこは赤黒い場所だった。

「い、い…はっ。」

辺りを見渡すと何処か部屋みたいだが部屋にしては小さく赤黒い。

左手で床らしき所を触ると、ブニブニしていて好ましくなかった。

そして微かに揺れながら空気が入ってくるとかが理解出来た。

「俺はあの時に飲み込まれたはず…」

いつのまにか血は止まり、先程よりは楽になった。
(とにかくしばらくはこの場所について考えないと、まだ助かるかも
しれない……！)

そう考えると悠斗はひとまず寝た。
そして気づかなかった。

ここが化物の腹の中ということに。

「ん、むう？」

気がつくのと、先程とは違い揺れは無くなり、空気がより多く入って
きたと感じられた。

「なんだ？何かが変わったのか？」

そう考えてると、突然何処からか音が聞こえてきた。

ぐぐぐ!!

「そーいやあれからなにも食べてない……」

しかし、その考えに至っても食料も何も無い。

ついでに言うとおの光景を見た後に何かを食べようとは思えな
かった。

「それでも食わなきゃ死ぬ……」

そう言うとお悠斗はある物に手を出す。

それは……

ギリイブチツ！

瞬間、辺りが揺れて悠斗は転がる。

「おわわ!!」

悠斗がやった事は、ブニブニする化物の肉を食い千切った事だ。それに驚き化物は動き回り、ついでに中の悠斗まで揺らされた。しかし突如として状況は変わった。

「いてて…つて！腕が生えた!?!」

そう、腕や脚から白い何かが生えてきて、元の体に近くなった。

「なんでだ…何にもしてないし…」

まあ、悠斗は脳筋なので頭を使う事は慣れていないため、理由なんて考えても仕方ないと判断した。

(それにこの腕や脚…凄え力が出てくる…これなら！)

悠斗は得意の武術の構えを取る。

そして…

「はああ!!」

一点集中の突き。

それによつて目の前にあつた肉壁が粉碎されて光が入ってくる。

7

「っ、外だ!」

悠斗は喜びによつてはしゃいで外へ出て行く。

その先には……………

「えっ……………」

地獄に成り代わっていた。

目の前には無数の化物がうようよしており、街のビルや建物は崩れてたり、破壊されていた。

そして悠斗の後ろには腹の抉れた化物が倒れていた。

そして悠斗は悟る。

自分はいいつの肉を食ったんだと。

そう考えてると強烈な吐き気が迫ってくる。

「おえっ……げほっ……げほっ……おええええ!!」

ほとんど何も入っていない胃の中から何かを吐き出そうとし続ける悠斗。

しかしそんな事をしても起きてしまった事はもう塗り替えられない。そんな中でも化物共は悠斗を襲いかかる。

「けほっ……あーくそ……分かつちまつたじゃねーか……」

周りにいた全ての化物が近くの食料である悠斗を狙いに来る。

その数はざっと二十はいるだろう。

完全に逃げれないように包囲され、死が近づいてくる。

しかし、逆に死んだのは化物達だった。

それはあまりにも一瞬の出来事。

襲いかかる化物共を殴り蹴り、化物の体を抉り破壊していく。

「俺は……人じゃないんだ……」

右腕や右脚だけにあった白い身体はいつものまにか両腕両脚についており、体は完全に治っていた。

「それに分かる……」

彼はもう人ではなく化物になってしまった。

そして化物を喰らった事で化物が手に入れた情報を知ることが出来た。

化物になった少年は歩いて行く。

希望のある場所へと。

三年後。

あの日、空からの化物バーバテックスが地上に降りてきてから三年。

今丸亀城には六人の少女と一人の少年が住んでいた。

桔梗の勇者、乃木若葉

山桜の勇者、高嶋友奈

彼岸花の勇者、郡千景

姫百合の勇者、土居球子

紫羅欄花の勇者、伊予島杏

巫女、上里ひなた

そして、化物の勇者、霧島悠斗

神樹さまの神託を聞ける巫女と、唯一バーテックスと戦える勇者が丸亀城に住み、日々訓練を重ねてきた。

「よ、若葉」

「悠斗か」

「また難しい顔してたぞ」

二人は丸亀城の天守閣にいた。

そこから景色を見ながらあの日を思い出す。

「あれから三年か…」

「ああ…」

二人は思い出す。

三年前、あの日には人は空を奪われ、四国以外の世界を奪われた。

「必ず取り戻す…それが人として、勇者としての責務だ…!」

「ああ、勿論だ」

若葉は巫女で幼馴染のひなたと一緒に、力に目覚めて勇者として人々を四国まで誘導してきた。正に勇者と呼べるだろう。

しかし、一度は死にかけたが、化物の力を手にして復活してきた悠斗。

本来なら勇者は悠斗を切っても問題はない。しかしそうしないの

は友奈や球子が止めたしひなた達も大人を説得しようと頑張った結果、三年の月日の中でその力を物にした悠斗。

そんな七人だから超えられるものもある。

「絶対に負けてたまるか！」

七人の絆は何よりも硬く強い。

その絆がいずれ、神に牙を剥く。

日常

香川県、丸亀城

かつては武将達が住み着いていた城だが、今は天からやってきた化物、バーテックスに唯一対抗できる勇者と巫女の拠点兼学校として使われている。

勇者とは、バーテックスに対抗できる神樹様の力が込められてる武器、『神器』を使える少女達の事だ。

そして巫女とは、神樹様の声を聞くことの出来る少女。

刀の神器、『生太刀』を使う若葉は、真面目で誠実な少女。幼い頃から居合を習っており、適任と言えるだろう。

籠手の神器、『天の逆手』を使う友奈は、明るく元気な少女。幼い頃から武道を習っている為、使いこなせるだろう。

鎌の神器、『大葉刈』を使う千景は、無口で大人しい少女。高地にある小さな街に住んでいたが、特には何も習っていないが鎌は攻撃の幅が広く、攻撃力も高いだろう。

楯の神器、『神屋楯比売』を使う球子は、元気でやんちゃな性格とは反対に何故か楯に選ばれた。

ボウガンの神器、『金弓箭』を使う杏は、控えめな性格とは逆に攻撃的な連射可能の弓を持ち、唯一の遠距離を可能とする。

そして神器を持っていない悠斗は本来なら戦えないが、あの日に戦う術を身につけた。

しかし、常人ではそんな事は出来ない。

何故か悠斗が何の副作用も無くバーテックスの力を取り込む事が出来たのだ。

午前六時前。

まだみんなが寝ている時間帯。

そんな中、丸亀城の周りを走る一つの影があった。

「はっはっはっ…」

悠斗だ。

悠斗は丸亀城に来てからも鍛錬を怠らずに努力をしてきた。そのおかげで勇者の中では一番のスタミナを持っている。

走っている理由としては、体力的な問題だけでなく、肉体的にも強化しないと戦闘の時にあの力によって肉体がズタズタになるからだ。

過去、一度だけ悠斗は病院送りになった。

練習中に、あの力を使ったら全身が内側から焼かれる様な感覚に襲われるからだ。

そして、走り続けていると……

「ん？」

悠斗の目に入ったのは椅子に置かれているタオルとスポドリ。

前までは何も置かずに走っていたが、ここ最近は誰かがタオルとスポドリを置いて行くが、悠斗はそれが誰かは知らない。

そもそもこんな時間に起きれる人なんてあの中にはいるとは思えなかった。

「みんなの誰かなんだろうけど……うーん分からん！」

あっさりと考えるのをやめる悠斗。

そして休憩を終わり、部屋に戻ってシャワーを浴びに行く。

そんな彼を見守る姿があった。

「気づいてくれるかなあ……」

丸亀城での授業は午前中は他の学校と同じような事を学んでいる。しかし、午後になるとバーテックスについての事が教えられる。

バーテックスは三年前に侵攻して人類の大半を食い尽くした。しかし、日本の神々が一つとなり、神樹様となってこの四国を覆う結界

を張った。

この四国以外にも一部の地域でバーテックスの侵攻に耐えているところが三つあった。

長野県の諏訪、北海道、沖縄。

この三ヶ所にも勇者がいるらしいが、四国とは違い神樹様の加護すら無いため生き残る確率は低いそうだ。

そして座学を終えると、今度は実践練習が行われる。

各自が木製で出来た自分の武器を持ち、きちんと扱えるように練習していた。

その中でも若葉と友奈、悠斗はズバ抜けて目立っていた。

「セイツ！」

「はあっ！」

「えいっ！」

若葉達は元々練習して基礎からしっかりとやっていた為、動きは体に染み付いていた。

特に悠斗は身体能力が上がっている為、速さも威力も段違いだった。

そしてそれを側から見ている千景達は呆然としていた。

「いつ見ても凄いわね…」

「だよな〜タマはもう見慣れてきたぞ」

そう言っている球子だが、足はプルプルと笑っていた。

「タマっち先輩絶対に怖がってるでしょ〜」

「んな!?!なんだとー! あんずう!」

「え〜!」

「何してんだ? あいつら…」

本当は怖がっている事を見抜かれて、杏に襲いかかる球子。その光景を動きながら見ていた悠斗は訳が分からなかった。

「さてと…」

悠斗は気持ちを切り替え、みんなから距離を取る。

目を閉じ、自分の中にある力を引き出す。

若葉達も離れて、悠斗を見守る。

すると悠斗の姿が変わり、腕と脚に白い鎧が纏われ、口にはマスクの様なものに覆われ、悠斗の体は白い何かで出来たスーツに包まれた。

そしてそこから技の練習もやってみる。

『モードチェンジ：白虎』

腕に付いていた鎧の形が変わり、虎の手の様になった。

さらには…

『モードチェンジ：薙刀』

片方の鎧の形を変え、薙刀の形に変化させる。

「ふう」

「流石に手馴れてきたな」

変身を解くと、若葉達が駆け寄ってくる。

「まあ、三年も苦勞してようやくだけどね」

そう、三年。

この力を制御する為に三年間、毎日体を鍛え、耐えられる体を作り、制御出来る様に頑張っていた。

「それでも凄いよ！ゆう君！」

「そうね、バーテックスの力を扱える様になるなんて…」

「そうですね。この力が使えるって事はそれだけでも強力ですからね」

それぞれが感想を言ってくれて嬉しくなるが、いつもなら聞こえてくるはずの声がか聞こえないから、球子が気になり、周りを見渡す。

すると……

「うづー」

「た、球子？」

少し離れた所で球子が地面に倒れていた。

「平気？」

「うがー！！」

「は？え？ちよっー！」

突然倒れていた球子が悠斗に突進してきた。

「ぶはっ！何だよ球子!？」

「助けてくれ〜悠斗お〜ひなたが〜！」
「ひなた？」

普段は巫女としての訓練をしている筈だが、今日の前に何やら怖いオーラを出しているひなたが笑顔でこちらを見ていた。

「た、ま、こ、さ、ん？」

「ひいー！」

「ひい…！」

「ダメじゃ無いですか〜訓練中にはしやいで走っちゃあ…！」

「〜〜〜!!!」

我慢の限界が訪れ、球子は急いで若葉の方に逃げる。

「お、落ちて着けひなた…何が合ったんだ？」

「うふふふ、悠斗さんには関係ないですよ。ちよこーと球子にお話があるだけなので〜」

「いや目が笑ってないぞ…！」

明らかに怒っているひなた。

そしてイマイチ状況が読めない若葉と友奈。

「タマちゃん？何をしたの？」

「タマは別に悪い事はしてないぞー！ただちよつと杏を追いかけたただけだー！」

あつさりと自分のした事を認めしちゃう球子。

そして…

「若葉ちゃん、球子さんをこちらに。大丈夫ですよ？ただ小一時間ほど貰えればいいので」

「む、そうか…なら頼んだぞ」

「んな!?」

「はい。分かりましたよ」

「若葉の裏切り者ー!!!」

球子の残響が響き、小さくなっていく。

それから球子は、ひなたに連行されて小一時間ほどある説教の時間が開始にされた。

訓練が終わり、ひなたによる説教も済んだので、若葉とひなた、そして悠斗はある部屋に向かう。

「あー、あー。聞こえるか？白鳥さん」

『ええ、聞こえますよ。乃木さん』

通信室。

そこでは毎日この時間に若葉と長野県、諏訪周辺にいるたった一人の勇者、『白鳥歌野』が連絡を取り合い、その日のことを報告していた。「こちらは特に変わった事は無かった。いつもと同じ様な日常だった」

『そうですか…こちらとしては本日の襲来は中々手強く、少々手こずりましたが、死者は出してません。ただ…重傷者が出てしまいました…』

歌野の声は重く、悲しみが感じ取れた。

「そうか…では聞きます。あとどれだけ持ちこたえれそうですか？」

『……持ちこたえれて後…三日です』

「っ……」

『なので乃木さん。お願いがあります』

「なんだ？」

『あとは任せましたよ』

「っ……ああ、任せてくれ…」

次の瞬間、通信の奥で悲鳴と何かが崩れる音が聞こえた。

「白鳥さん！」

『もう来ましたか…乃木さん』

「ああ」

『白鳥歌野！行って参ります!!』

その言葉を最後に通信は途絶えた。

横で聞いていたひなたや悠斗も顔を伏せているしかなかった。

「ひなた、みんなに伝えてくれ」

「なんでしよう」

「もうすぐ敵が来ると」

今まで四国に敵が来なかったのは諏訪があつたからだ。それが無くなったとなれば、敵もこちらに攻めてくるだろう。

「若葉…」

「大丈夫だ…白鳥さんの意思は無駄にはしない」

若葉は前を向く。

命を賭して人々を守ろうとした勇者の為にもこれから始まる戦いは負けられない。

「これからは私達で守るんだ。この街を、この世界を！」

初めての戦い

諏訪との通信が途絶えて一週間。

あれから何も起こらなかった。

「なー悠斗ー敵はいつ来るんだー?」

「さあな。あいつらの事なんて誰も分からんだろ」

あれから一週間ずっと警戒状態が続き、球子は机にぐだっていた。

「タマっち先輩シヤキツとして。だらしないよ」

「あんずうく」

「アハハ。タマちゃん、アンちゃんに頼りつきりだね」

「…もうちよつとしつかりして欲しいわ…」

杏と球子のやりとりを見て笑う友奈とそれを見て呆れる千景が教室にいた。

本来今日は休日だが、近いうちに敵が来ると言う事で勇者達は城での待機となっていた。

「そーいや若葉とひなたは?」

「そーいえば見ませんね」

「どうしたんだろ?」

普段ならいる筈の若葉とひなたがそこにはおらず、悠斗の心に不安が出始める。

(いかんいかん。今は敵に集中しよう…)

二人なら問題は無いと思ひ、気持ちを切り替える。

そして次の瞬間…

端末から警報が鳴り響く。

「つーまーか…」

悠斗は時計を見る。

それは本来なら動いている筈の秒針すら止まっていて、動けるのは悠斗を含めた勇者達だった。

「タマつち先輩…これって……」

「敵なのか悠斗!？」

焦る二人。いや、悠斗も焦っていた。

すると、目の前から光が勇者達に迫ってくる。

「わわっ!ぐんちゃん!!」

「高嶋さん!」

「杏!」

「タマつち先輩!」

友奈と千景は手を握り、球子は杏を守る様に前に立つ。

そして勇者達は光に包まれて消えた。

目を開くとそこは薄暗い所で悠斗は大きな木の根の上に立っていた。

「ここが…樹海…」

樹海。そこは神樹様によつて作られた結界の中で、バーテックスと戦う場所である。そして戦闘が終わるまでは現実世界での時間は止まっている。

「あ!向こう若葉ちゃんがいるよ!」

「なら向かうぞ」

端末を見ると、少し離れた所に若葉の名前が書かれており、そちらに向かった。

「若葉ちゃん！」

「友奈か」

「って早!？」

若葉の姿は変わっており、その姿は戦闘用の勇者服に変わっていた。

勇者達の服はそれぞれ花をモチーフにした色をしている。

若葉は桔梗を連想させる青色。

「よし、じゃあ俺らも」

「みんなで勇者になるー!」

友奈の声に合わせて、各自が端末を押す。

友奈は山桜を連想させるピンク色。

千景は彼岸花を連想させる紅色。

球子は姫百合を連想させる橙色。

悠斗は腕と脚に白い鎧をつけ、胴体は白い服を纏っている。

しかし、杏だけは変身できなかった。

「ぐ、ごめんなさい……」

「杏、無理すんなくて。タマ達に任せタマえ」

本来、勇者になるには安定した精神ではないとなれない。

今の杏の様に怯えきっては当然、勇者なるなど出来ないのだ。

「よし、これは私たちの初戦だ。何が起こるか分からないから常に気を配って行くぞ!!」

若葉は鼓舞する様に演説をして、モチベーションを上げる。

「なら…もちろん貴方が先頭で戦うんでしようね…」

そんな空気を消す様に、千景が言う。

「勿論だ。リーダーである私が先頭に立って戦おう」

「おい待て。誰が先頭だとかは関係ないだろ。協力して戦えばいいだろ」

「っ…分かったわよ…」

「みんな仲良しなのは良いけど今は後にしよ？」

「「仲良し？」」

友奈の発言に全員が戸惑いを表す。

「友奈？誰が仲良しだった？」

「へ？ぐんちゃんとか若葉ちゃんとかゆうくん？」

「「ええええ……」」

まさかの言葉に言葉を失う三人。

「とにかく話あつてる理由はあいつらの所為だからとにかく戦おうよ！」

「はあー、そうだな。とにかく戦うか」

その言葉に各自が戦闘態勢に入った。

先頭には若葉と悠斗が立つ。

「勇者達よ！私に続けッ!!」

若葉の言葉を合図に二人は前に飛び、目の前にいるバーテックスを葬る。

若葉は刀でバーテックスを両断する。

洗練されたその一撃は次々と敵を斬りふせる。

「はっー！」

目の前の奴を横薙ぎに一閃。背後にいたのは回った勢いで斬り裂く。

ちらつと悠斗の方を気にかける。

どうやら向こうも問題は無い様だ。

ならばする事は一つ。

「斬り伏せるッ!!」

迫り来る敵を殴る。

その一撃はバーテックスの硬い体にめり込み、吹き飛ばす。

腕と脚についている鎧によって腕力も脚力も上がり、高速で敵を潰

していく。

「っ、ウラァー！」

髭の様なものの攻撃を飛んで避け、上から叩きつける。そして回し蹴りで複数のバーテックスを瞬殺する。

先程から頭痛が酷い。

この鎧を付けていると、何やら頭痛が酷くなり、思考が鈍る。

(多分…取り込んだからか？破壊衝動というか…暴れまわりたくなる…っ！)

気がつくとも目の前に迫っていたバーテックスが再び悠斗を襲う。

「しまっ…！」

また喰われると思い、体が硬直する。

しかし、いつまでたつても痛みも来ない。

目を開けると、目の前のバーテックスは消えていた。

「なんで…！」

「大丈夫ですか!？」

悠斗の下にやって来たのは、先程まで怯えて変身出来なかった杏だった。

「あ、杏?…どうして…！」

「なんかタマっち先輩に守られてたら悠斗さんが危なくて……そしたらなんか変身出来たんです」

杏の姿は紫羅欄花を連想させる白色の勇者服になっており、手にはボウガンを持っていた。

「ごめん。ありがとうな杏」

「い、いえ。大丈夫です…！」

「っと、敵が来たな…！」

「わ、私も戦います！援護なら出来るので！」

「なら、杏を守んなきゃな。傷でもつけたら球子に色々言われそうだな」

球子の方を見ると、楯を投げて敵を次々と倒していた。

「あれは…正しい使い方か？」

「あはは…！」

そして、目の前には敵が一気に来ていた。

「よしっ！行くぞ杏！」

「はいっ！」

「やあっ！」

友奈は拳を振るう。

悠斗と戦い方は似ているが、悠斗の場合はあの武装に合わせる為、普通の武道から改良して独自の戦い方を身に付けていた。

「まだまだいっくよー!!」

無数にいるバーテックス達を一撃で倒していき、数を減らしていく。

目の前のは拳で。後ろのやつは脚で。左右からの攻撃は飛んではら下に拳を突き落とす。

それに加え、下から突き上げて真上に飛ばしたりもしていた。

しかし、そこで目に入ったのは…

「っ！ぐんちゃんっ！」

戦えずにへたり込んでいた千景がおり、その周りには複数のバーテックスがいた。

(駄目だ！このままじゃぐんちゃんが…！なら！)

友奈は覚悟を決め、息を吸う。

そして…

「来いッ！『一目連』ッ！」

神樹様にアクセスをして、その中にある知識から概念的に力を取り出す。それが『切り札』と呼ばれるものだ。

友奈の場合、妖怪である『一目連』の力を引き出す。

一目連とは、暴風を操る妖怪。

その力を纏った友奈は、一瞬で千景の下へ移動した。

「平気!?ぐんちゃん!？」

「え、ええ…」

千景は震えており、武器である大葉刈も持っていないかった。

「惨めよね…伊予島さんにあんな事言ったのに…」

「そんな事無いよ!誰だつて怖いもん!だから一緒に戦おう?」

友奈は千景に手を伸ばす。

千景は先程まであった恐怖が嘘の様に無くなっている事に気がついた。

(やつぱり、高嶋さんはすごい…私にここまで元気をくれるなんて…)

千景は立ち上がり、友奈の手を取る。

「ありがとう高嶋さん。もう大丈夫よ」

「うん!じゃあ頑張ろう!」

二人は前に進み、抜群のコンビネーションで敵を倒す。

千景が鎌を振るい、複数を同時に倒す。その撃ち漏らしを友奈が拳で倒していく。

そのまま敵を倒していく。

そしてしばらくすると、順調だった戦いが崩れ始める。

「撤退していく?」

「いや…これは…」

バーテックス達は攻撃をやめ、一箇所に集まっていく。

バーテックスは合体していき、一つの個体となろうとしている。

「若葉!進化体がくるぞ!」

「なにっ!？」

悠斗は若葉に向かって叫び、状況を言うが、若葉の方はこちらよりも敵が多いみたいで苦戦していた。

「っ、くそ!」

「悠斗さん!敵が動きます!」

「杏は数発矢を撃て!球子!」

初めての戦い、三年ぶりに実際に見たバーテックス達。現実では一瞬の出来事だが、悠斗達にとっては長い戦いに感じられた。

そして悠斗達は再び光に包まれた。

「戻ってきたな…」

目を開けると、そこは丸亀城の近くの外に倒れていた。

「みんないるか？」

「タマも杏も無事だ…」

「平気よ…」

「私も問題ないよ？」

「全員いるみたいだぞ。若葉」

若葉の言葉にちゃんと全員反応し、生存を確認した。

そこへひなたがやってくる。

「皆さんお疲れ様です」

「ひなたか…」

「とりあえず皆さんは病院ですよ？」

「まあ、そうだろうな」

何となくは予想をしていた事だ。

あれだけの戦いをして無傷なんて誰もいないのだから当然、病院送りだろう。

「それでは行きましようか」

勇者達はひなたと大社の人たちに連行されて、病院へと向かった。こうして、勇者達の初めての戦いは終わった。

休み

戦いが終わった後、病院に送り込まれた若葉達は暇を持て余していた。

「暇だ〜…」

いつもなら球子の適当な言葉にも返事をしてくれる悠斗や友奈は今、まだ検査を受けていた。

「長いわね、あの二人」

「確かに長いな」

「まあ、友奈さんは切り札の『一目連』を使ったから異常が無いかわしつかり調べてるはずだけど…悠斗さんは？」

「呼んだか？」

不意に聞こえた声の方を振り向くと、そこには所々湿布を貼った悠斗がいた。

「遅かったが何を調べてたんだ？」

「ああ、それならほら。これだよ」

悠斗が服の袖を上げると、目に入ったのは見た目は普通の腕だが、その気配は完全にバーテックスと同じ気配だった。

「入念に調べられてたけどそんなに大したもんじゃないらしいぞ」

「ならいいけど…」

明るめに言葉を言う悠斗だが、杏だけはその言葉に疑問を持っていった。

（そこまで入念に調べられてたのに特に無し？そんな事は無いはず…悠斗さんは一番負担が掛かるはずなのに…）

人ならざるものをその身に纏い、その力を振るう。そんな事が出来る奴は人では無い。

杏はその疑問を聞くことが出来なかった。

その次の日。

友奈は切り札を使った代償が無いかを調べるため数日は入院。その間に千景は高知の故郷に帰っていた。

そして若葉達は、街でお昼を食べていた。

「うんまー!! やっぱこの雛は美味しいな!」

「それを言うなら親だって美味しいぞ。この食感の雛では味わえないだろう」

「なにおう!?! 雛はこの柔らかさがタマらないだろ!?!」

二人はどっちがいいかで今にも争いを始めようとしていた。

そんな所に…

「おねーちゃん達ケンカはだめっ。親も雛も美味しいでしょ!」

この店にいた子供が二人のケンカを止めに入る。

「こ、こちら! す、すいません娘が…」

「い、いや……」

「こちらこそ……」

若葉も球子も流石に子供に言われたら引き下がるしか無いだろう。

「ふふっ、若葉ちゃんも球子さんも子供相手は引き下がるしかありませんね」

「だな」

「恥ずかしいくらいですわね」

悠斗達は恥ずかしがる二人を見て微笑む。

あまり外での食事を取らない悠斗にとってはこういった事はない為、嬉しく感じられた。

「友奈はもう少しは入院か… やっぱ切り札は負荷が大きいな」

「使わないな越した事はないけど、やっぱり難しいよな…」

昨日の戦闘は杏の変身の遅れや千景が怯えたりで、多少のトラブルがあった。

それに樹海を傷付けたりとすると、現実でも被害が出る為に迅速に倒すことも要求される。

「またあいつらもやって来るからその時はしっかりと対応出来るように頑張ろう」

「そうだな」

「タマに任せタマえ！」

「わ、私も出来る限り頑張ります！」

悠斗の言葉に三人も賛同し、気合いを入れ直す。

その頃、千景は……

(また帰ってきた……)

故郷である高知県のある街に帰ってきていた。

その街の人口は少なく、田んぼや畑が多い。

(あまりいい思い出なんて無いのに……)

今回千景が故郷に帰ってきた理由は、天恐である母の様子を見てこの事だった。

そもそも天恐とは、あの日、バーテックスがやって来た事をキツカケに空を見ることが怖くなることだ。それにもステージがあり、ステージ三以降は入院が必要だそうだ。

(母さんは寝てるとして……父さんが看病してるとは思えない……)

などと考えてる内に家に着いていた。

「ただいま……」

「ん？おおー千景じゃないか!!」

出て来たのは少し大きめだけど細い男だった。

そう、彼こそが千景の父なのだ。

「帰って来てたのか！言ってくれば車を出したのに」

「いいよ別に……それより母さんは？」

「あ、ああ。今は寝てるよ。さつき薬を飲んだからぐっすりだ」

父の言う通り、母の様子を見ると今は本当に寝ているようだ。

「そうだ千景。久しぶりに帰って来たんだし街を歩いて来たらどうだ？」

「……」

正直、気が進まなかった。

理由としては、過去に千景はこの街でいじめの標的にされ、酷い目にされていたからだ。

「お前の同級生も久々に会いたいだろうし」

「そう、ね……」

千景はそう言うのと家を出て、散歩をしに行く。

久しぶりに街を見るがあまり変わっておらず、時間が経った気がしない。

「誰もいないわね……」

見える景色は畑や田んぼ。なのに人は見えず、案山子がポツリと立っているだけで、寂しい景色が続いていた。

しかし、目の前から人影が見えてきた。

それは――

「あれ？郡さん!？」

「ほんとだ――!」

「久しぶり！覚えてる?! 私だよ！同じクラスだった!」

三人は千景と知るなり、近づいてきて話しかけて来た。

（前はもつと態度が違ったのに、私が勇者ならすぐに態度を変えて持ち上げる……）

普通なら疑ったり色々あるが、千景はそうならなかった。なぜなら

千景はこの街の人たちに優しくされたことが無かったから。

そして人はドンドン増えていく。

「千景ちゃんかい？今度うちに来てくれよ。サービスするぜ」

「怪我してないかい？風邪は？薬ならうちに任せておくれ」

「郡さん！今度遊べる!？」

あれやこれやと街の人たちは千景に群がる。

そして千景のとつた行動は――

カツンッ!

その音で場を静めた。

常備しとけと言われて持っていた神器、『大葉刈』で地面を鳴らし、静かにさせる。

「私に……私に価値はありますか？私を……愛してくれますか？」
今の千景が聞きたいこと。
自分には価値があるか。
自分を愛してくれるか。
それを聞いた街の人達は……

「勿論じゃないか！」

「貴方はこの街の誇りよ！」

「この街は安泰だな！」

「千景がいるからこそ俺らも食っていけるんだ！もつと自信を持つてもいいぞ」

街の人達は千景の事を誇りに思っていた。

千景はこれまで言われたことがないような言葉を聞き、次なる戦闘に向けて闘志を燃やし始めていた。

千景が帰って来てから数日後、二回目の戦闘が来た

「前回よりは多いか」

悠斗の呟いた通り、前回よりも数が増えていた。

「私は先に行くぞ」

「あ！待ってください！若葉さん！」

杏の言葉を見無視して若葉は先に向かっていった。

その場には悠斗、杏、球子、千景、そして病院から抜け出した友奈がいる。

「しゃーない。とにかくやるぞ。球子と杏で後方から援護を頼む」

「はい！」

「任せタマえ！」

「千景と友奈は協力しながら頼む！」

「はい！」

「ええ……！」

各自バラけて、バーテックスを倒していく。

特に凄いのは悠斗と千景だ。

まずは悠斗からだ。

強化された脚で吹っ飛ばし、速攻で敵を倒す。

「おおっ！」

拳の先を尖らせ、貫通力を上げて突撃する。

「どけえ！」

一気に貫通して突き進む。そこから空に飛び上がる。

「白玉速射!!」

掌から複数の白玉を作り、すぐさま撃ち放つ。それは一瞬で地面に落ち、的確にバーテックス共を撃ち抜く。

「第二射!!」

地面に降り立った後も即座に撃ち放つ。

そこへ後ろからバーテックスがやってくるが、悠斗は気にせず前に進む。

悠斗のガラ空きの背中に噛み付こうとしたその時、神樹の下から矢と楯が飛んでくる。

「サンキュ！球子！杏！」

二人の方を向き、親指を立てる。二人も悠斗の方を見て親指を立てた。

安心して悠斗は敵の中に走っていく。二人が後ろにいるから安心できる。

一方千景は――

「セイツ！」

自分より少し大きめな鎌を横に薙ぎ、複数の敵を屠る。

鎌は隙が大きい武器だが千景はそれを克服し、流れるような動作で鎌を振るう。

「ッ！はああ！」

気付いたら真上にいたバーテックスは杏の矢が射抜いた。そこか

ら囲んで来た奴らは、千景の鎌と球子の楯の一撃で倒す。

いつもは友奈と連携する千景だが、故郷から帰って来てからは練習も努力して、今もこうして杏や球子と協力してバーテックスに立ち向かっていった。

(私が頑張ればみんなが私を認めてくれる……! だから今は死ねない……!!)

握っている鎌に更に力が加わる。

四方八方からやってくる敵を見て千景は不敵に笑った。

「来なさい……塵殺してあげるわ……!!」

時間が経った頃、バーテックスが集まり始める。

しかし、前回と違うようで今回の奴はデカイだけに見える。

「私が行こう!」

若葉が敵の隙間を通り、進化体に近く。

「ツ!!ダメだ!退がれ若葉!!」

殆ど反射的に悠斗は叫んでいた。

それは自分の中にあるバーテックスによる共鳴かそれとも……いずれにせよ危険と思い叫んでいた。

しかし時すでに遅し。

「ぐああ!!」

「若葉ちゃん!!」

若葉を攻撃したのは矢のようなもの。それはバーテックスの口のようなところから射出され、勇者達を狙っていた。

友奈も助けに行こうとするが、敵の飛ばして来た矢のようなものに行く手を塞がれる。

全員が逃げに徹しているしかなかった。

だが、そんな中ただ一人進化体に向かって走る姿があった。

「ダメだよ!ぐんちゃん!!」

千景だ。

しかし、その姿は彼岸花を連想させる勇者服から変わり、白い布のようなものを被っている姿に変わっていた。

そして決定的に違うのは今の千景が七人いるということだ。

「千景！」

気が付けば千景は貫かれていた。

「ぐんちゃああん!!」

「大丈夫よ。高嶋さん」

聞こえた声は変わらず七ヶ所から聞こえた。

「え？」

「ち、千景……う？」

みんなが混乱する。

そんな中悠斗は気が付けた。

(精霊……攻撃よりというよりは耐久型か?)

「安心して……これが私の切り札……『七人御先』よ」

先程死んだはずの一人の千景も復活しており、再び七人になっていた。

そのまま千景は進化体に向かって走る。

迫り来る矢は多少受けるが、避けつつ接近しに行く。

敵も焦りを感じ取れたのか、一気に数が増えて避けるのが困難になった。

「千景ええええ!!」

七人共避けられないように見えたがそこで気付いた。

一人の千景がもう一人の千景を投げようとしていることに。

そして矢が刺さる前に千景を投げ、進化体に当たる。

六人の千景は刺さって死んだ後、残りの千景の下に戻ってきた。

「これで終わりよ……ッ!!」

七ヶ所からの同時攻撃。

流石に進化体も崩れていった。

これで二回目の戦闘は終わった。

「友奈さん！」

「はい……」

現実に戻ってきた勇者達は、その光景を見ていた。

友奈は病院から抜け出して戦闘に参加したため、こつてりとひなたに説教をされている。

「なんで抜け出すんですか!? まだ安静なんですよ!」

「うう……許してひなたちゃああん」

若干（かなり）泣きかけている友奈を見て流石のひなたも怒るに怒れなかった。

「千景、異常は無いか?」

「問題ないわ……少し疲れただけよ……」

切り札を使ったから友奈みたいに入院かと思えばそうでもないらしい。

「まあ、なんにせよ無事に終わって良かったな」

「っ!」

千景は突然見せる悠斗の笑顔を見て一気に顔が赤くなった。

「ん? どうした千景? 異常あるのか?」

「な、なんでもないわよ!」

千景はそう言うのと走って部屋に戻っていった。

「なんだったんだ?」

まあ、鈍い悠斗は勿論ついていけなかったのである。

昔話

「俺の話?」

「悠斗さんはあまり自分の事を話してくれないので……」

食堂で昼食を食べていたら杏が言ってきた。

「確かに話さないな」

「うーん。まあ、話すのはいいけど、とりあえず食べ終わった後な」

「なんで?」

「いや……吐くぞ?」

『……………』

悠斗の一言に全員が押し黙った。

そのままの空気で昼食を食べ終わった。

「さて、じゃあ話すけど何処からがいい?」

「はいはい! ゆう君の子供の頃の話が聞きたい!」

「いいですね〜というわけで悠斗さん! お願いします!」

友奈の提案に杏が賛同して悠斗の方を見る。

悠斗も話すべきだと判断して覚悟を決める。

(下手したら引かれるかもな……それだけならまだ耐えられるけど、話さないよりは話した方がいいよな……)

「俺には母さんと妹が一人いたんだ。父さんは他界していたから母さんと妹と三人で暮らしてたよ。妹は結構俺に懐いててよく一緒に遊んでたよ。それに友達よりも俺を優先しててさ、近所じゃ有名だったよ。仲良し兄妹って」

悠斗はどこか懐かしむような言葉で話す。その内容をみんなはしっかりと聞いていた。

「俺は母さんからいろんな武術を習っててそれで毎日鍛錬してたけど、妹はそんな俺を毎日見ててくれたんだ」

「そんなに面白いやつだったのか? その鍛錬って」

「いや。至って普通の鍛錬と同じだよ。でも理由は知ってるよ」

「それは?」

「一度だけ倒れたことがあるんだ。長時間の鍛錬のし過ぎでうちの道

場の真ん中で。それを見つけたのが妹だったんだ」

道場で偶々習った事を全部復習しようなんて思い、お昼からずっと復習していた。基本の形から応用など色々な事を学んでいた為、それを全てやっているとは外は日が沈んでいた。

そして家に戻ろうとしたら気を失い、そのまま道場に倒れ伏していた。

そこへいつまで経っても帰らない悠斗を迎えに来たところ倒れているのを妹が見つけた。

「その時の事は母さんに聞いたよ。凄く大泣きしながら俺のことを教えてくれたって。そのおかげで大事にはならず済んだらしい。あの意味、妹は命の恩人だよ」

小さく微笑みながら話す姿は、みんなにとって家族想いだということが分かる。

「それから妹は俺にくつつく様になって、前以上に仲良くなったよ」
「良いご家庭なんですね」

ひなたは笑顔で悠斗に言う。悠斗にその笑顔はまるで太陽の様に見えた。

「あれ？でもそれだとご飯の時に聞いても問題なかったんじゃない？」

「そうね……今のだけならさっきでも話せたはずよね」

友奈と千景は疑問を持った様だ。

「……ああ。それは今から話すよ……」

そう言う悠斗の表情は一瞬で暗くなった。

「今まで俺の装備について話していなかったよな。それについて話すよ」

覚悟を決め、顔を上げる。

「あの日、バーテックスが来た時に俺は母さんと妹と一緒に逃げたんだ。家は潰されてとにかく走って避難してたよ」

周りからは悲鳴や家が崩れる音。さらに肉が潰れる音まで聞こえていた。

「そこで妹が転んだんだ。バーテックスは迫っているし妹もすぐには動けなかったよ」

他のメンツの顔がどんどん青白くなっていくのが分かる。

「俺は母さんの手を振り払い妹を助けに走ったよ。家族がいなくなるのは嫌だったからさ。でも……」

「助からなかったんですか?」

「いや、助けたよ。でもその後には俺は喰われたんだ。バーテックスに」
『ッ!!』

あまりにも突然の告白。今まで三年間共に暮らしたのに知らなかった真実を今伝えられた。

「その時は右腕と右脚を喰われて苦しんでたよ。でも母さんと妹が俺に近づいてきて助けようとしたら……あいつらがまたやって来た」

妹を助けた代償で右腕と右脚を失った。それだけなら良かった筈だ。

「母さんが後ろから喰われかけてて、俺はまた動いたよ。二人を突き飛ばして俺が喰われた。今度は全身をね」

「ッ……まで。ならなんで生きてるんだ?」

既に顔が青白くなっている若葉達。しかし、聞かずにはいられなかった。

「それは……食べたんだ」

「食ベ……た?」

ゆつくりと頷き、一番重要な事を伝える。

「俺はバーテックスを食べた。そして取り込んだ。だからその力を使えるんだ」

「ま、待ってください!!なら……ならなんで!あんな嘘をついたんですか!」

ひなたは席を立ち、悠斗に向けて声を上げる。

嘘。

悠斗は今まで隠していた。この事実を。より正確に言うならば誤魔化していた。

「貴方は言ったじゃないですか!バーテックスの一部が取れたから大社に持っていったら解析出来たから使えたって!」

「あれはその場凌ぎの嘘だよ。みんなに嫌われなくなかったからね

……」

「そんな……」

その場にいる全員が戸惑う。

「ごめんな。突然こんな事言われても困るよな……」

「いえ……でも少し……考える時間を下さい」

明らかに動揺をしているが、落ち着く為にも若葉達は一度悠斗抜きで話し合うことになった。

「……」

「……………」

悠斗を除いた全員は若葉の部屋に集まっていた。そして未だ一言も言葉は発せられていない。

「それで……………みんなはどう思う」

ようやく若葉が話し始める。そしてすぐに杏が意見を述べる。

「私は……問題は無いと思います」

「あ、あんず!？」

「悠斗さんは今まで必死にあの力をコントロールする為に頑張ってきたのは私たちがよく知っている筈です。それに……私は知ってます」

最後の言葉は周りには聞こえない小さい声だった。

そこへ友奈と千景も話し始める。

「わたしも問題無いと思うなく。ゆう君が危ないって思えないもん」

「そうね。仮に危なくなっても私たちなら平気でしょ?」

「でも……危険がある事には変わりありません。それに悠斗さん自身にも問題があったら……」

ひなたは泣きそうになりながらも、悠斗のことを考えている。あれ程の力を代償なしに使えるなんて考えられないし、暴走なんてしたら若葉達がどうなるか。

「タマには難しい事はよく分からん。でもさ、悠斗はあんだけ苦しんだからさ、タマ達だけでもあいつの支えになってやんなきゃダメだと

思うんだ」

「タマつち先輩……そうだね。悠斗さんを支えてあげなきゃ」

「あとは貴方達よ」

千景が二人の方を見る。

「私は……できれば苦しんで欲しく無い。だが、あいつの事だ。止めたって止まらないだろう。ならばせめて私達でサポートするだけだ」

若葉は立ち上がり、覚悟を決める。

その瞳は硬い意志を感じられる。

「ひなたはどうだ？」

「私も信じます。若葉ちゃん達が信じるんですから……ですが、無理は絶対にさせません。それは譲れませんし譲りません」

「なら決まりだ」

若葉はみんなの方を見る。

それぞれの目には覚悟が決まっており、悠斗のいる部屋へと歩いていく。

「戻ってきたって事は話し合いは終わったのか？」

「ああ、みんなの意見も聞いた上で決めてきたさ」

座っていた悠斗の正面に座るように若葉達も座る。

「悠斗、私達はお前を信じる。仮に暴走しても私達が止める。だからお前も信じて戦って欲しい」

頭を下げながら言った若葉に悠斗は驚いていた。

正直、あの話をしても信じてくれるなんて思っていなかったからだ。

「こんな話をしても信じてくれるなんてお前達は重度のお人好しだよ……」

そう言う悠斗の目からは涙がボロボロと落ちていた。

そんな悠斗に若葉達が駆け寄り、涙を拭いたり安心させたりと、色々する羽目になった。

「お前ら」

「どうした？」

「ありがとな」

悠斗の顔は先程とは変わり、今は満面の笑みになっていた。

とある場所では……

「ほほう。あれが妾の星屑を喰らった者か」

一人の少女が目の前映像を見ていた。

「が、まだ弱い」

映像に映っているのは少年。それも銀髪の。

「もうちつと張り合いが欲しいのう」

そう言うと少女はパチンツと音を鳴らす。すると出てきたのは大量の白いバーテックス。通称、『星屑』と呼ばれたもの。

それが一箇所に集まり、融合し始めた。

「さて、時間がかかるがまあ、良いだろう。それまで楽しませてみよ」
少女の笑い声が辺りに響く。

その周りには異形の化け物達がバラバラに侵攻していた。

無意識

あの話し合いから数日。

次の戦いが始まった。

「今回は前回と同じくらいか。なら連携して当たろう」

「お、おい悠斗？あそこになんかいるんだが……」

球子が指を指した方にいたのは腕は短いが顔？らしきところが大きいバーテックスだった。

「……変態か？」

「変態ね」

「変態さんだね」

「変人ですかね？」

「変態だろ」

「変態だな」

満場一致であのバーテックスが変態だということが決まってしまった。

「まあ、いや。とにかく行くぞ」

「待ちタマえ！悠斗！」

変態のところは向かおうとすると球子が止めてきた。

「どうした？なんかいい策があるのか？」

「ふっふっふっ。あいつらにも知能はあるんだろ？ならばこれの出演だ！」

球子を取り出したのはうどん玉だった。

「そ、それは!？」

「え、何その反応?」

「それはこの香川でも有名で人気のありすぎてすぐ売れてしまう高級うどん玉ではないか!？」

「いやいやちよつと待てよ」

あまりにも詳しく目を輝かせる若葉。しかし悠斗はそんな若葉を見て疑問に思った。

(あの変態に口つてあるか?)

「さあ行くぞ！喰らえー！うどん玉だー!!」

「いや待ってっ！」

止めようとしたが時すでに遅く、うどん玉が投げられていた。

しかし――

ドテツ

『なっ!?!』

「は〜」

変態はあろうかとかうどん玉を無視して神樹に迫る。

「な、何故だ!?!あの高級なうどん玉だぞ!?!許せん!!」

「嘘だろ!?!」

「ありえませんか!!」

「変態さんおかしいよ!」

「狂ってるわ……」

五人共変態を責めるが、悠斗だけは呆れていた。

「いやあの変態に口は見えるか?」

『……………』

ぐうの音も出ない正論に押し黙る。

「んじゃ先にあいつを処理してくる」

悠斗はそう言う走り、変態に迫る。

「さてと……」

幸いにも変態の他にはまだ来ていない。こいつが特段速いのだろう。

「なら増援が来る前に仕留める!!」

一気に踏み込み、鎧を纏わせた拳で顔を狙う。

しかし、その後鋭い一撃を変態は軽やかに避けた。

「なっ!?!ぐっ!?!」

避けた後すぐに変態が蹴りを悠斗の横っ腹に入れる。その威力は高く、一気に飛ばされる。

樹海の根に当たったが、鎧のお陰でそこまでダメージは無かったが、その分飛ばされた。

(やべーなあいつは……単発でちまちまやるよりは当たる面積を大き

くして攻めた方が当たるか……)

考えをすぐさままとめ、実行する。

『モードチェンジ：ハンマー』

拳の鎧を変え、二つのハンマーを作り出す。

「よし」

確認を済ませてすぐさま飛び立つ。

そして見えたのは若葉達に変態に苦戦していた。

若葉が斬りかかるが、それも飛んだりして避けて進み、飛んで来た球子と杏の攻撃もタイミングよく避ける。

「全員距離取つとけ!!」

「っ！わかった!」

若葉が悠斗の姿を見て瞬時に理解して離れる。そして真横から超突進してくる悠斗は二つのハンマーを構える。

「オオオオオラアア!!」

片方のハンマーを横から大きく振るう。当然隙ができる所に蹴りを入れようとすると、悠斗が先程の勢いで回っていた。

そして逆にそれが隙となり次の一撃が放たれる。

「吹き飛ばええええ!!」

もう片方のハンマーが変態の顔にハンマーをブチ抜く。

そのまま遠くまで吹っ飛ぶが、その後は再起不能だろう。

何せ追い討ちをかけに向かったのはあの二人だから。

「やあああ!!」

「セイツ!」

変態がやってきた所にやって来たのは友奈と千景だ。

千景は大きく鎌を振り、脚を削る。動けなくなった所に友奈が勢いをつけた拳で胴体を殴りつける。

変態も流石に耐えきれずに消えた。

「こっちは終わったよー!」

「了解だ!そのまま近くの奴から倒してくれ!」

「はーい!」

悠斗は友奈と千景に付近のを排除させてこちらも逆方向の奴を倒

そうとしたが……

「よしじやあ行くぞ……つて若葉は？」

「若葉さんならタマっち先輩を連行先に飛び込んでいきましたけど……」

「は？杏、それは本当だな？」

「は、はい」

悠斗の顔を覗くと、額に大きな青筋を作っていた。

「あいつらは後で説教だ。行くぞ杏。まずはこいつらを倒すぞ」

見渡せば星屑達も接近しており、再び戦闘が始まる。

「援護は任せてくださいね！」

「ああ、頼りにしてるぞ」

視線を交え、悠斗は前に、杏は矢を構えて敵を相手にする。

「とりあえず邪魔だつ！」

二つのハンマーで敵を正面から殴って行く悠斗。それ後ろで杏がサポートをする。

時には悠斗が武器を変え、臨機応変に対応する。

「ゆうくーん!!」

そこへ上から友奈が降って来た。真下にいた星屑を踏み潰して。

「中々えげつないな友奈」

「真っ先にそれ!？」

「それよりこっちは終わったわよ」

千景も少し遅れて悠斗達と合流する。

「なら千景。若葉の手伝いに行けるか？」

「乃木さんの？なんで……いや、そうね。分かったわ。」

「理解が早くて本当助かるよ。千景」

若葉は技術こそあるが、一対複数はまだまだ全然だろう。それに対して千景は、鎌という広範囲で威力のある武器を使う。技術は未熟だが、若葉達と協力すれば問題はないだろう。

「んで、友奈と杏はこっち側を一緒にやんぞ」

「はいー!」

「なら悠斗さんは武器を範囲型にして先頭を。友奈さんは後ろで撃ち

漏らしを。私は二人のサポートをします!!」

杏はすぐさま作戦を考え、それを伝える。悠斗は多種多様な武器で戦えるからそれを生かし、友奈は手数の方の多さを生かす。

二人の戦い方をよく見てないと出来ない作戦だが、杏らしいだろう。

「なら、『モードチェンジ：槍』」

「おお槍だー!」

「じゃ、突撃するからよろしく!!」

悠斗はそう言うのと鍛えられ、鍛えられた脚で突撃してくる。

「はああ!!」

横薙ぎに一振り。その後、槍を返して前方に進みながら斬る。

「友奈! そっちに何体が行った!」

「数は四体です! 友奈さんは前の方を!」

「わかった!」

前に進んで来た星屑を得意とする武道で殴る。綺麗に決まった右ストレートは一撃でその胴体を歪ませる。

「もう……一体!」

振り向きざまに右脚の踵で星屑の顔を貫く。

「あと二体は……と、アンちゃんがやってたか!」

他の二体を見ようとしたら、矢が降ってきて一度にいくつも星屑に突き刺さる。

その間にも悠斗は槍を振り回し、斬り刻んでいた。

（槍だとそろそろ限界か……?アレ試してみよ）

「杏! 時間をくれ!」

「え? わ、分かりました! 友奈さん!」

「オッケー! 任せてよ!」

入れ替わるように二人の位置は変わり、友奈が素早く動いて敵を翻弄し、杏の矢が仕留めていた。

その間に悠斗は槍を消し、新たな挑戦をしていた。

（片方はすぐいける。こっちは後で改良だ）

多少は頭痛がするが、頭は働く。

足りない頭をフル回転させて悠斗は挑戦する。

(これで……どうだ!?)

「っしー行けるぞー!」

「友奈さん!今です!」

使った時間はほんの少し。それでも友奈は十分に敵を減らしてくれた。

「後は任せろ!」

手にしていたのは一本の刀と一つの銃。

そして……

「らあ!!」

目の前の一体を斬り、付近のを撃つ。そして再び斬る。これを繰り返して付近の敵を一瞬で倒した。

「すごい……」

「ゆう君今の何!?見して!」

「やめろ友奈!暴発するだろ!」

拳銃の見たさに抱きついてくる友奈。それを側から見ている杏。

「むむむ……え、えいつ!」

「なあ!?あ、杏!」

何故か杏も悠斗に抱きつきに来て、悠斗は正に両手に花状態になっていた。

「ああもう!くつつくな!」

「ふぎゅ!」

「あう!」

悠斗は二人の腕を強引に離して落ち着かせる。

「後は向こうが終わるの待つだけだろ!」

「待つだけだから暇なんだよ!ゆ〜くん」

またふらふらと近づいていくる友奈。

そんな時に、若葉達も終わったように悠斗達の方へ戻ってきた。

「何しているんだ?」

「た、高嶋さんが霧島くんのだ、抱きつこうとしてる……!」

「え、と。ち、千景?」

悠斗が目にしたのは手に持つ鎌に力を込め、明らかに敵意を向ける千景だった。

「霧島くん……なんて羨ま……！いえ、なんて事を！」

「お、落ち着け千景。俺は悪くない」

「問答無用！」

地を蹴り、悠斗に襲いかかろうとした瞬間。

「ぐんちゃんやめて！私を巡って争わないで!!」

「友奈さん……使い所が違います……」

友奈の謎の発言によつて、千景は武器を収めていた。

「ふう、助かったか？」

「お疲れ悠斗」

「ああ、若葉もな」

すると辺りが光だし、樹海が終わろうとしていた。

「若葉……」

「なんだ？」

「後でひなたと一緒に説教するからな」

「な、何故だ!？」

若葉をからかいながら樹海が解けるのを待った。

「さて若葉ちゃん？何か申したいですか？」

「いや……何故私は捕まっているんだ？」

目の前には悠斗とひなた。左右には球子と千景が立っていた。そして若葉は正座させられていた。

「全く若葉ちゃんは……」

「お前が任せろと言うから俺は任せたんだけぞ？」

「んまあ！それは私の教育がなってなかったと!？」

「いやいや、お隣さんの球子さんや千景さんにも頼ればよかったものを……」

「……これは何の茶番だ？」

「さあ？」

目の前で突然始まった夫婦茶番に驚き、固まる若葉。そこへ楽しそうに一言が飛んでくる。

「若葉ちゃんもひなお母さんに頼りなよ！親不孝者になっちゃおうよ！？」

「友奈さん……茶番に乗っかる意味は……」

「ほえ？楽しそうだから？」

「さつきからなんなんだ……」

茶番が続き頭を抱える若葉。

そこへひなたの端末に一本の電話が入る。

「もしもし？はい……え？それはホントですか!？」

ひなたは珍しく嬉しそうにはしゃいでいた。

「なんだあ？ひなたーなんなんだー？」

「ふっふっふ。球子さんもこれを聞いたら喜びますよ」

「やけに勿体ぶりますね」

「だな」

ニヤニヤと笑顔で焦らすひなた。

痺れを切らした球子がひなたに聞く。

「ああもう！ひなた教えてろー！」

「ええ。いいですよ。なんと！大社が温泉旅館で休んで来いって!!」

「温」

「泉」

「旅」

「館!!」

あまりの嬉しさに球子は飛び跳ねて、友奈は千景に抱きついていった。

「それっていつからだ？」

「えーと明後日です」

「うええ!?!早いよ」

「そか？普通だと思うが……」

「ダメだよゆう君！女の子は準備に時間がかかるの!!」

友奈は立ち上がり、千景を連れて何処かへと行くこうとする。

「お買い物してくるー!」

「え!?ちよっ、高嶋さん!」

千景は引っ張られて街まで向かってった。

「なら、私たちも準備をしておきましようか」

「そうだな」

そう言って女性陣は各自部屋へと戻ってった。

ひとときの安らぎ

「ああああ~~~~!!」

悠斗は一人で温泉に浸かっていた。

それもそのはず、ここは大社に用意された温泉旅館。そして悠斗は男湯にいる。

「やっぱ露天風呂は一人だと広いな〜」

そう。今はこの旅館には勇者たち六人と従業員しかいない。そんな中で男湯は悠斗のみ。それはもうかなり広い。すると……

「さあ！ 今から恒例の身体計測するぞ!!」

隣の女湯から球子の大声がこちらにまで聞こえてくる。

「いやいや、それは若葉たちが止めるだろ……」

「ひゃあ!？」

完全に不意打ちの声。

しかもそれはおそらく杏の声だと思われるが、何せ男湯と女湯。多少は距離がある為、誰の声かは分からなかった。

「こら球子！ 風呂くらい大人しくしろー!」

「へっ！ タマにはタマだって羽目を外したいんだー!!」

バシャバシャと泳いでるのか、水の音が聞こえてくる。

「流石に止めた方がいいか？ ……球子ー！ 大人しくしないと桶投げるぞー!」

「悠斗!? 当てれるもんなら当ててみやがれってんだ!」

「言質は取った」

近くにあった桶を持ち、女湯の方を見据える。

「さ、行くぞ……せいっ!」

ゴンツッ！ ポチャンツ

何かに当たり、湯に落ちた音が聞こえた。おそらく当てれたであろう。

「杏ー! どうだー?」

「命中！ 大当たりですっ!」

声のトーンが少し上がり、嬉しそうだ。

「なら俺は先に部屋に向かっとくぞー」

「わかった」

返ってきたのは若葉の声。

小さいが、千景や友奈の声も聞こえる。

「ぐんちゃんスタイルいいね〜！ どうしてそんなに肌も綺麗なの？」

「え、あ、そ、そんな事言われても……私は普通にしてるだけだし……でも少しくらいならやつてはいるわ……」

「なら今度教えてよ！ ぐんちゃん！」

「っ、ええ。もちろんよ」

ともかく楽しそうだなによりだと思いつつながら、旅館の部屋まで案内してもらった。

「こちらです」

「広いな……ってまさか全員ですか？」

「そう伺っておりますが？」

「大社め……」

案内してもらい、大社に後でお灸を据えようと考えていると、若葉達も露天風呂から出てきた。

「ん？ どうした悠斗。部屋の前に立ったまんま」

「若葉か……どうにも部屋はこの一部屋らしいぞ」

「んな!? それじゃあタマ達は悠斗と一緒に部屋ってことか!？」

「まあそうなるな」

「と、とにかく中に入りませんか？」

ひなたに言われたままに部屋に入って行く。

「問題は誰がどこで寝るかですね」

「私はぐんちゃんの横にいくねー!」

「た、高嶋さん!？」

「なら俺は隅でゆっくりしとくよ」

そう言う悠斗は、敷布団を部屋の角に敷き始める。

結果として場所は……

悠斗、杏、球子

若葉、ひなた、友奈、千景

この様な配置になった。

それからご飯も済ませて、残った時間は自由時間となった。

「さて、寝るにはまだ早いな」

「なら悠斗！ タマと勝負しろ！ あ、ついでに若葉も」

「私はどうですか!？」

「まあまあ、若葉ちゃん。いいではないですか。わたしは将棋を持ってきましたよ?」

「ひなちゃん準備いいね！ ぐんちゃんは何か持ってきてる?」

「ゲームならあそこに……」

千景が指を指すと、荷物置き場には大量のゲーム機が置いてあった。

「まさかあれ全部か?」

「ええ、何か好きなのある?」

「そうだな……RPG系あるか?」

そう言っていると千景はいくつかのカセットを出してきた。

「知らん奴も出てきたな」

「あ！ これは!？」

「伊予島さん?」

「私の好きな作家さんがシナリオを書いている奴です！ しかも即日完売して幻とまで言われた伝説のゲームです!! 本物は初めて見ました!!」

「あんずが壊れた……」

「初めて見たな」

杏の豹変に全員が驚いていたが、本好きの杏が好きな作家だ。その人が書いたシナリオとなれば、テンションが上がってもおかしくはないだろう。

「じゃあ……これやる?」

「いいんですか!？」

「ソロ用だけど推理とかがあってみんなでも楽しめると思うわ……」

おそらく千景なりの優しさだろう。

今までの千景は、ツンツンして誰とも関わろうとはしなかった。ここまで良くなったのも友奈のおかげだろう。

「やりますー!」

「推理なら俺もやってみたいな」

「なら二つのグループになってみてはどうでしょう? 杏さんと共に推理ゲームをするか、若葉ちゃんと一緒にトランプするか」

ひなたの提案に賛同し、それぞれが二手に分かれる。

その結果、杏と悠斗と千景と友奈。

そして若葉、ひなた、球子に分かれた。

「流石に1日では終わらないから切りどころは私が言うわよ?」

「それでも大丈夫です!!」

杏の目には星が見え、キラキラと輝いていた。

「アンちゃん嬉しそうだね」

「ま、それ程好きなんだろうな。その作家さんが」

「ほら、高嶋さん達もやりましょ?」

千景はそう言うのと友奈と悠斗の手を取り、杏の元へと連れてくと、杏が楽しそうにプレイしてるのがよく分かった。

その一方で、球子達は将棋をしていた。

「むむむ、将棋は中々難しいな」

「そう言ってるけど若葉はタマに全勝してるだろ? そろそろ勝たせてくれよ」

「いや、何事にも手は抜かない。相手に失礼だしな」

「凜々しい若葉ちゃん! 絵になります!!」

「つてひなた! やめてくれ!」

悩み続ける球子の側で、ひなたは若葉の写真を撮り、それを消そうと若葉がひなたを追いかける。

「ああ! もう! 負けだ負けー! タマには将棋は合わん!」

「ならトランプはどうだ?」

「よーし! 大富豪なら負けないぞ!」

数分後……

「アガリだ。球子」

「なぬ!?　ぐぬぬ……」

「なんだ球子。また負けたのか?」

杏たちのやっていたゲームも一区切り着いたので若葉達のを観戦してた悠斗が球子に話しかける。

「まさか若葉がここまで強いなんて……」

「おい球子。それは私をバカにしたな?」

「まあまあ若葉ちゃん。ルールだってあやふやだったじゃないですか」

「ひ、ひなた!」

ひなたの暴露によって焦る若葉。

その光景は、とてもいい雰囲気だった。

「さて、そろそろ時間的にも寝るか」

「ですね」

「おーい、電気消すぞー」

電気が消え、部屋が暗くなる。

楽しい休みも終わりが近かった。

とある夢を見た。

血だらけの五人。

ただ一人で抗う少年。

しかし、たった一人にその少年もやられる夢。

「はっ!　はあ、はあ」

目が覚めたのはひなただった。

汗をかき、眠気も消えていた。

「まさか……神託?　でもなんでこんなにはつきりと……」

とにかくひとまず部屋を出て、自販機で飲み物を買って座り込んだ。

「血だらけの五人は若葉ちゃんたち？　なら少年は悠斗さんということに。それに少し見えて消えたあの少女は？」

頭が痛くなるような内容だった。

確かに今までも多少は傷を受けて帰ってきたが、今回の襲撃は今までよりも傷ついていた。

「これは知らせるべきですね」

「ひなた」

名前を呼ぶ声が聞こえた。

いつの間にか悠斗がひなたの後ろまで来ていた。

「悠斗さん？　寝付けないんですか？」

「いや、ひなたが出ていくのが見えてな。それに様子も少し変だったからな」

あの暗い部屋でそこまで見抜かれているなんて思わなかったが、あの意味悠斗らしいとも思える。

「神託か？」

「鋭いですね。……明日詳しくは言いますが、次の襲撃は危険が高いと思ってください」

「それは気合を入れなきゃな」

「でも皆さんならきつと……」

そうは言っても、ひなたの顔は暗いまま。かけれる言葉も無く悠斗は不安を取り除くことが出来なかった。

それから部屋に戻ったらすぐに寝ることが出来た二人。

帰りのバスで、ひなたが神託の事を伝える。

「昨日の夜に神託が来ました。内容は注意を促すようなものでした」

「なんでも、相当危険が高いらしい」

「ん？　何故悠斗は知っているんだ？」

普通に会話に入ってきた悠斗に若葉は疑問を持った。

「昨日聞いたんだよ。夜中に目が覚めてな、ひなたが起きたからな」

悠斗が話し終わると、ひなたは神託の詳細を伝える。

「まず、バーテックスの量は今までより多いです。それに人が出てきます」

「人？ それはバーテックスから生まれたってことか？」

「そこまでは……でもその人は悠斗さんを圧倒してました」

『っ！』

悠斗を圧倒する程の実力。

それは今の勇者達よりも強い事を表している。

「ですから、次の襲撃は今まで以上に注意をしてください」

「分かった。だがその敵はどうする？」

若葉の疑問も最もだ。

しかし……

「悩んでも仕方ない。今更出来ることなんて無いんだぞ」

「悠斗は呑気過ぎる。それで死者が出たらどうする」

「若葉は堅すぎるぞ。友奈を見習ってみたらどうだ？」

悠斗が指を指すと、そこにはなんとも和ましい空間が広まっていた。

「ぐんちゃん！ このお菓子おいしーよ！ はい、あげる！」

「え、あ、ありがと。高嶋さん……」

手に持つてるお菓子を千景の口まで運び、食べさせる友奈。とても和ましい空間がそこにあった。

「相変わらずですね」

「友奈ー！ タマにもくれー！」

「いいよー！」

球子は遠慮せずにお菓子をもらっていた。

「あれはあれで気を抜きすぎではないか？」

「まあ、あれくらいいいでしょ」

若干呆れつつも、若葉は気を抜く。

「まあ、そうだな。私は少し気を張りすぎていたかもな」

「ま、気楽に行こうぜ」

「ああ」

そうして一行は城に戻り、その日は自由に過ごした。
その二日後。最悪がやって来た。

災害

休暇から二日。

悠斗達は城で勉強していた。

「あく暇だなく」

「タマっち先輩！　ダメだよ自習だからって何もしないのは」

「だってよくあんずくタマはもう頑張ったんだぞく？」

時間としては昼食後の一番眠くなる時間帯。球子は机にだらけていた。

そこへけたたましい警報音が教室に鳴り響いた。

「うおっ！　敵か!？」

「球子気合入れろよ」

「おうよ！　タマに任せタマえ!!」

各自端末を持ち、光に飲み込まれる。

「さて、この景色にも慣れて来たな」

目を開くといつもの樹海の景色が見えた。

そしてその先には星屑達もいつも以上に見える。

全員が丸亀城の天守閣からその光景を見ていた。

「神託通り、多いな」

「みんなでがんばろー！　ね？　ぐんちゃんー！」

「ええ。頑張りましたよう」

全員が気合を入れてる中、若葉は張り詰めた顔をしていた。

「どうした？　若葉」

「いや、なんでもない」

「？　そうか」

その時は気にしていなかったが、それが命取りになる事を悠斗はま

だ知らなかった。

「よし、敵さんもこっちに來てる事だし、こっちも行くぞ！」

「「「おおー!!」」」

気合を入れて声を出すと、若葉がものすごい勢いで飛び出してつた。

「ちよ!? 若葉!?!」

「くそ! またか!!」

前回もこうして若葉は飛び出していたが、前はまだ声が聞こえていた。しかし、今回は全く声が聞こえていない。

「くっそ! 俺が若葉のどこに向かう! みんなで他のを頼む!」

「待ってください!! 向こうは若葉さんを隔離しようとしています!

一人では……!」

「ならわたしが行くよ!」

悠斗の横に友奈が立つ。

「友奈……」

「時間が無いよゆう君!! 急ご!!」

「っ! あ、ああ! 杏!」

「はい!」

「こっちの指揮は任せるぞ!」

「っ、はい!」

悠斗はそう言って友奈と若葉の方へと走り出す。

「あんず、どうするんだ?」

「とりあえず千景さんを前にします。ですが私が精霊を使って敵を減らします」

「でもそれでは伊予島さんに負担が……」

「大丈夫です。すぐに解除しますから。なのでそこからは千景さんをお願いしたいです」

杏は千景と球子に作戦の内容を伝える。

「それでいけるのね?」

「こちらの敵ならこれで行けるはずです」

「ならタマもそれでいいぞ! あんずを信じてるからな!」

球子は楯を持ち上げ、やる気を見せる。

「ならそれで行きましょう」

千景は前に出て敵を見据える。

そして杏は準備する。

「頼むぞー！ あんずー！！」

「うん！ 任せてタマっち先輩！」

杏は城の屋根の上で待つ。敵の数は多く、三人でもキツイだろう。

そこで杏は深呼吸する。

そして……

「お願い！！ 『雪女郎』！！」

杏の姿は変わり、紫羅欄花の装束から白い装束へと変わった。

そして辺りの温度が下がって行く。

「お願い凍えて！！」

その一言で、辺りが吹雪に襲われる。

そして星屑達を凍らせる。

「これが……伊予島さんの精霊……」

「あんずー！！ 前が見えないぞー！！」

「我慢してタマっち先輩！ 千景さん！ もうすぐ出番です！！」

「ええー！」

吹雪が止み始めると同時に千景は突撃する。

吹雪が止んだお陰で敵は減った。しかしそれでも敵は星の数ほどいる。

「まさか私が伊予島さんの指示を聞くなんてね」

苦笑しつつも、敵を斬り倒して行く。

そして、千景も精霊を使う。

「出番よ。『七人御先』」

彼岸花の装束の上に白いフードを被り、鎌を構える。

「さあ、来なさい。塵殺してあげるわ」

「友奈！」

「任せて！」

友奈は迫るバーテックスを殴り、吹き飛ばす。

『モードチェンジ：槍』!!」

槍へと武器を変え、力を込める。

「捕まれ友奈！」

その声にすぐさま反応して悠斗の槍を掴む友奈。

「行くぞおおおおお!!!」

勢いをつけて駆け抜ける。

その一走で何十ものバーテックスを蹴散らして行く。

そして目の前まで若葉が見えてきた。

「若葉あ!!」

「っ！ 悠斗!? なぜ来た!？」

「うるせえ！」

「痛っ！」

会って早々に若葉に強烈なチョップをかます悠斗。

「バカか!?! 一人で突っ込むな!! みんながどれだけ心配したと思ってる!!」

「っ！ ……すまない」

「謝るならまずは生きて帰るぞ。説教はひなたと二人掛かりでやってやる」

悠斗はそう言つて槍を構える。友奈は先に攻撃を仕掛けていた。若葉も少し遅れるが、刀を持ち、戦闘態勢に入る。

「死ぬなよ」

「若葉ちゃん達もね」

「絶対生きて帰るぞ」

三人は囲んでいた星屑達を蹴散らしていく。

友奈は鍛え上げた武道で殴り、突き進む。しかしそれでも敵は多く、少しずつダメージと疲労が増えていく。

「やあああああ!!」

それでも持ち前の運動神経の良さで致命傷は避けていく。

「若葉ちゃん! そつちに少し向かったよ!!」

「了解だ! 任せろ!」

最前線で戦っていた友奈をスルーし、奥に進む星屑を若葉が流れるように斬り刻む。さらに囲んできた奴らにはその場で回り、その顔を斬る。

しかし、その隙に背後から星屑が体当たりを若葉に与えてくる。

「ぐっ! 舐めるなあ!!」

態勢が崩れたが、すぐに持ち直してそいつを瞬殺する。しかし、その背後と若葉の背後から星屑がほぼ同時に押し寄せてくる。

「しまっ……!!」

「っ! 若葉ちゃん!!」

鮮血が飛び散る。

よく見ると、星屑の口周りには血が付いていた。

「っ!! てめええええらああああ!!」

それに気づいた悠斗も若葉の下に急いだ。しかし、それを邪魔するように星屑が壁になる。

「どけっ!!」

槍を回し、細切れに斬る。その後に数体目掛けて槍で突く。

そんな時に……

「ッ、ぐあっ!」

「ゆう君!」

突如悠斗が苦しみ出す。

しかもそれは尋常ではなく、相当ヤバイ感じがしていた。目の前では悠斗が苦しみ、少し前では若葉が二体の星屑に挟まれてダメージを受けている。

友奈はどっちを助けるかですぐには動けなかった。

「……………めん若葉ちゃん！　すぐ行くから！」

友奈はまず悠斗を助けに周りの星屑達を倒しにかかる。

そして悠斗の下へ駆け寄り、安全な場所へと運ぼうとする。

「ゆう君！　しっかり!!」

「ゆう、な？　わるい……………」

「平気だよ！　それよりも……………」

「ああ、もう平気だ。友奈は若葉の所に行ってくれ」

悠斗はそう言うところで降りて、武器を作り出す。

「俺は多分平気だ。それより若葉のが心配だ」

「大丈夫なんだよね？」

「ああ」

「……………」

しばしの静寂。

そして友奈は踵を返して前を向く。

「行ってくるね！」

「ああ」

友奈を見送った後、悠斗は城でも若葉のいる方でもない所を向く。

その先には人影が見えていた。

「あれがひなたの言った人……………でもこの感じは……………」

その感じは懐かしく感じるが、それが何なのかは悠斗には分からなかった。

とにかく人なら話が出来ると思い、話しかけてみる。

「あんたは誰だ？　人か？」

「……………」

無言。

しかし、少しづつ近づいて来ており、徐々にその姿と顔が見えた。

見えたのは少女だった。身長は球子と同じかそれより少し小さい。髪の毛は真っ赤に燃える様な赤色のロング。

何よりも異質なのは服。

真っ黒な服かと思えば所々に黄色に光る何かがついており、異様な存在感を出していた。

「子供？」

「妾を子供と申すか小僧」

たった一言。

それだけで悠斗は身体中から大量の汗を出し、後ずさりしていた。

「まあ良かろう。妾として今は本気で殲滅しに来たわけではないの」

殲滅？

全く意味が分からない事を言うが、こいつならやりかねないと悠斗は本気で思えるほどに、その存在は圧倒的だった。

「あ、アンタの目的は何だ？ アンタは誰なんだ？」

「そうだろう。お主は面白い体質をしておるからそれに免じて妾の正体、そして目的を教えてやろう」

そう言うと少女は悠斗にまた一步と近づいてくる。

「良いか？ 妾の正体は——」

「悠斗ー!!」

すると聞こえて来たのは球子の声。

そこには杏や千景もいた。

「球子……」

「ん？ この子がひなたの言ってた人か？」

「何じゃ？ お主ら。今はそのこのヤツと話しておる。邪魔するでない」

「んだとー!? ガキの癖にー!」

「っ、バカ！ 球子！」

次の瞬間、球子の横を何かが通り過ぎてった。

球子の頬からは先程のが当たったのか、血が垂れていた。

「タマっち先輩！」

「っ！」

球子は黙って崩れ落ち、杏が急いで支える。千景は手に持っていた鎌を持ち直し、構える。

後ろを見ると、樹海の根に前に戦った敵が放って来た矢が深く突き刺さっていた。

「次は無いと思え。妾に二言はない」

「「ツツ!!」」

その目は明らかな殺意に満ちており、杏は球子と一緒に崩れ落ち、千景は今にも鎌を落としそうになり、足も震えていた。悠斗も同様に、動けなかった。

そこへ、二つの影が舞い降りて来た。

「ゆう君! みんな!! 平気!?!」

「すまない! 遅くなった!」

若葉と友奈だ。

周りを見渡すと星屑達は消えており、あとは目の前の少女のみとなった。

そして若葉達も状況を見る限りでどの様な状況かが分かった。

「ふむ……これが勇者か。しかしこやつ以外は正直どうでも良いな」

「何をブツブツと言っている」

「ああ、すまん。こっちの事情だな。だから主らもちと寝とってくれ」

刹那、悠斗を除いた勇者達に先程と同じ攻撃が飛ばされる。

「ぐあっ!」

「きゃ!!」

「っ! きゃ!」

「若葉! 友奈! 千景!」

しかしどれも傷は酷いが、致命傷ではなくまだ治せる範囲内だった。それに治せる範囲とは言え、脚を中心的に攻撃されてとても戦えないだろう。

「くそ!」

悠斗はその身の鎧を変え、壁を目の前に作り、若葉達を守ろうとする。

しかし、その行動も一瞬にして無駄になった。

「ほれ、眠つとけ」

いつの間にか若葉達の後ろに現れた少女は首を叩き、気絶させる。
「なっ!?!」

「さて、小僧には話があるが、先程小僧は妾の正体を聞きたがったな」

「それで?」

「正体を教えてやろう」

それが嘘か本当かは分からなかったが、今はバーテックスには謎が多い。

もし敵なら有力な情報が出てくる可能性もあった。

「妾は天の神。この世界を、人類を根絶やしにしようとする者だ」

「……は?」

「だから妾は天の神だ。そこで小僧に提案だが、妾側へ来んか?」

悠斗の頭は一度に多くの情報が来た為、思考が停止していた。それでも容赦なく悠斗に近づいて来る天の神を名乗る少女。

「そ、それで何のメリットがある」

「メリットと言われてもな、貴様は妾の作り出したこいつらがいきや死んでたのだぞ? そして妾が作ったということは妾の一部のようなもの」

そう言って天の神は指を鳴らす。真横に星屑が現れる。

「だからほれ、こんな事も出来る」

その体を触り、何かを唱えると、突然星屑の形が変わって行く。

「なっ!?!」

「だから貴様には拒否権なぞない。まあ、それだと面白くないからしないがな」

「……」

目の前で変異した星屑。目の前で倒れている勇者達。

絶望的な状況だが、それでも悠斗はどうしても我慢出来なかった。

「おい、天の神様よ」

「お?」

「俺はお前の方へは行かない。それに人類も失わせない」

そう言うのと悠斗は半身を前に出して戦闘態勢へと入る。

「そうか。それならば仕方ないな」

しかし、そう言うのと天の神の表情が一変する。

「ならば貴様にも用はない」

刹那、天の神が消え、悠斗の背後に回る。

「っ！」

「ならば精々、妾を楽しませれるように努力するんだな」

「ぐふっ！」

一刺し。

どこからか出てきた針によって、悠斗の腹は貫通されていた。

「ではな。しばらくしたらまた様子を見に来てやろう」

「ぐ、ま………て………！」

その言葉を最後に悠斗の意識は途切れ、樹海も解けていく。

亀裂

ひなたは樹海が解けた後、若葉達を病院へと連れてった。傷だらけとはいえ、思いのほかすぐに治った若葉達は病室の前に集まっていた。

理由は悠斗と友奈が未だに目を覚まさないからだ。

「私のせいだ……」

「ええ、そうよ。あなたが最初に突出しなければ高嶋さん達もあれだけ傷を負わなかったし、私たちだってもっと戦えてたはずよ」

「すまなかった……私が無策に突っ込んだからだ……」

パンツ！

俯きながら無力さを痛感する若葉に千景は若葉の頬を叩いた。

「違う!! こうなったのはあなたの戦う理由が原因でしよう!!」

「ち、千景さん!!」

「あなたは……! あなたは復讐の為にしか戦ってない!!」

ひなたや杏が千景を止め、球子は倒れかける若葉を支える。

しかしその後千景は自室へと帰り、杏と球子も自室へと戻っていき、若葉とひなたのみが病院に取り残された。

「若葉ちゃん……」

「復讐の為か……たしかにそうなのかもしれないな……」

若葉の顔は暗く、ひなたも話しかけるのを躊躇っていた。

「私は……どうするべきなのだろうか……」

それから数日。

悠斗と友奈以外は学校へ来ていた。いつも通り球子と杏と一緒に教室へ入ると二人は驚愕した。

目にした光景は予想もつかない光景だった。

「拷問、鞭打ち、死刑、恥晒し……いや全部来てもおかしくない……私は何てことを……」

「ひい!? あ、あんず! 若葉が壊れてるぞ!!」

「ちよつ! 若葉さん!」

机の前でうずくまってあからさまに負のオーラを放っている若葉がいた。

「ひなたさんこれは!」

「えーと……何でしょうね……?」

「若葉がついにぶっ壊れた……」

そこへ千景が教室にやってきて、若葉を見た瞬間見たこともないような驚きをしていた。

「あ! 千景! どうにかしろよ! 若葉がぶっ壊れちまったぞ!」

「わ、私に言われても!!」

先生が来るまでその騒ぎは続いた。

「しっかし、若葉がこんなになるなんてなー」

「確かにこんなにぼーっとしてる若葉さんは初めて見ましたね」

「まあ、そんな若葉ちゃんも可愛いですけどね♪」

「あれが……可愛い?」

食堂で集まり、時間を過ごしていると、ひなたの端末にある一通のメールが届いた。

その日の夜。

若葉は眠れず、ひなたの部屋へと向かった。

「ひなた? 何を……」

「あ、若葉ちゃん。これはちよつと明日から大社に行かなくちゃいけなくなっただので……その準備を」

「大社に?」

「こんな時期にひなたを呼ぶ。

それが若葉には分からなかった。

「私は……」

「大丈夫ですよ若葉ちゃん。貴方なら乗り越えれます」

ひなたは笑って若葉を部屋から送り出す。

そして再び大社からのメールを読む。

『霧島悠斗の処遇について側近巫女の話を知りたい。明日の朝に迎えに行く』

簡潔に分かりやすく書かれていたメール。

しかしひなたは少しばかり怒っていた。

(悠斗さんは勇者。その扱いなのに処遇？ 絶対にそんなことはさせません……！)

朝、目を覚ますとひなたは既にいなかった。

若葉はいつも通り学校に行き、授業を受ける。それでも身に入らない。

(今となってはあの戦いで私は酷かったな……)

ぼーっとするとすぐにあの戦いを思い出す。

たった一人で無策で突っ込み、拳句助けに来てもらった二人が意識不明。

そればかりが頭に浮かぶ。

「若葉さん」

「杏？」

「少し、街に行きませんか？」

近づいてきた杏は若葉の手を取り、街へと連れ出す。

そこで若葉は杏から様々なことを教えてもらった。

この街の人たちのこと、そして新しい子が生まれたこと。

(そうか……過去より今、未来の為に戦うのか……)

杏の言いたいことや千景が言っていたこと。それらが分かった若葉は今よりも強くなれるだろう。

そこへ……

「あんずー！」

「きゃ!? タマっち先輩!」

「た、球子!? いつから!」

「へっへーん！ 杏が若葉を誘った時からずつと後ろにいたぞー！」
二人の間に入ってきた球子は二人に混ざる。

「千景もこっちこ来いよー！」

「っ!!」

「？ 千景も来ているのか？」

球子が道で呼び、近くの電柱の後ろで何かが動いたのが見えた。

そして観念したかのように千景が電柱の後ろから出てくる。

「千景……」

「口ではなんとでも言えるわ……」

「っ」

「だから……行動で示して。あの時は少し……私も言い過ぎたから

……」

「……ああー！」

こうして若葉達のいざこざも消えた。

しかし、その裏ではまた別の問題が発生していた。

「それでは、議論を始めましょう」

大社にある少し大きめの部屋。

そこに机が四角く並べられていた。前方にはモニターがあり、その前の机には大社のお偉いさんが勢ぞろいしていた。

「ではまず、そちらの医師から」

「はい。悠斗様は今意識不明の状態ですが、高嶋様よりも何故か傷の回復が遅れております。その原因として考えられるのは、まず悠斗様の身体でしょう」

モニターに映されたのは病院にいる悠斗だ。上半身を見ると失った右腕はバーテックスのように白いが、他は普通の人と変わらなかつた。

「こちらの右腕と下半身の右脚によりこちらの回復が遅められている

ように感じます」

悠斗が意識的に回復をするならば治りは早いが、無意識の時は体内のバーテックスの要素が治療の邪魔をする為、治りが遅くなる。

「他にこちらを見て頂きたいです」

『!?!?』

次に映されたのは背中。

そして見たものは誰しも驚愕していた。

「これは……!?!?」

「なんとということか……!?!?」

そこに映されたのはほぼ真っ白な背中。

そしてよく似ていた。悠斗の腕や脚、戦う時の鎧に。

「この映像から様々な仮説が立てられます。一つは悠斗様がバーテックスになりかけていること。他にも放置すれば暴走の可能性も」

「それでは他の勇者様に危険が!?!?」

「ええ」

お偉いさん達が話しているのをひなたは黙って聞いていた。

(確かに暴走の可能性もあるけど、話の内容がわからさまに悠斗さんを勇者から外すような会話。やっぱり恐れているのですね……)

このまま黙っているのも話が進まない為、ひなたは話に参加する。

「少しよろしいですか?」

「なんだね巫女殿」

「先程から聞いていると悠斗さんを勇者から外すような会話なのですがどうなんですか?」

「そ、そんなことはない。私たちは……」

「私は本音が聞きたいのですよ?」

ひなたは若葉達に見せたことのないような冷たい表情と冷たい声で話す。

それにはお偉いさん達ですら怯えかけていた。

「た、確かに、私たちはその案も頭には入っている。しかし、好んでやろうとは……」

「では悠斗さんへ怯える必要はないのでは? それに彼の戦い方や性

格は私たちが知っています。安全性なら私たちが保証します」
そう言つてひなたは席に着き、黙り込む。

そこへ……

「リーダー!! 悠斗様と高嶋様が目を覚ましました!!」

「なに!? 本当か!?!」

「はい!!」

「っ!」

「! お待ちなさい! 上里様!!」

ひなたは席を立ち、走る。

端末で若葉達に連絡しながら。

「若葉ちゃん!」

『どうした?』

「悠斗さんと友奈さんが目を覚ましました!!」

『ホントか!?!』

電話越しにも若葉の周りで喜ぶ球子の声が聞こえた。

これで元通り。全てが前に戻った。いや、前よりも勇者達は強くなれた。

「悠斗さん!! 友奈さん!!」

「ん? おー、ひなた」

「ひなちゃん!!」

ひなたは二人を見るなり飛びついた。

「いてて、おいひなた俺は病み上がりだぞ?」

「ひなちゃん落ち着こ〜!」

「あ、すみません。でも良かったです!」

三人がしばらく話していると、医師からしばらくは悠斗は安静、友奈は後一日休んだら動けるといふ判断になった。

「では今日は帰りますけど明日は皆さんを連れて来ますね!」

「ああ」

「うん!」

ひなたは帰る為に大社の車に乗り、城へ向かった。

「やはり危険性は拭えんか」

「ええ、ですからこうなつた場合の時は……」

「わかっておるよ」

大社の部屋で数人が話し合つてる。

机に資料。手には飲み物。

世の中は思い通りにはいかない事が多い。だが思い通り行くことも稀にある。

「常に最悪を考え、多少の犠牲で世界を救おうではないか」

決戦

悠斗と友奈が目覚ましてから一週間。

その一週間で悠斗はあの戦いで聞いたことを共有した。

「結局さー、あの少女は天の神って事でいいのかわ？」

「確かに悠斗さんを疑うわけではないですけど……」

「でも実際にあの力を体験したら信じるしかないんじゃない？」

球子と杏は未だに信じきれてないが、千景は多少は納得はしてるよ
うだ。

「だが、あいつを倒せばこの戦いも終わる筈だ。ならやる事は変わら
ないさ」

「若葉ちゃんの言うとおりですよ。でも……いつ出てくるか分からな
いので来たら撃退という形にはなりますけど……」

「まあ、仕方ないだろ。それでもあいつは強い。簡単にはいかない筈
だ」

「うーん……ならさー！ みんなでレベルアップしようよ!!」

友奈の言葉に誰もが疑問になっていた。レベルアップといっても
色んな事がある。技術的な問題、協力の問題。

強くなるにしてもこの問題は避けられない。

「でも確か友奈ってもう一体精霊がいるんだろ？ それは使えるのか
？」

「うう、ごめんねタマちゃん。アレはまだダメらしくて……」

「なら悠斗さんに聞いたらどうですか？ 家で様々な武術をやってい
たみたいですよ」

突然振られて反応に困ったが、考えてみると武術を習っていた悠斗
や若葉、友奈ならある程度動けるが、今まで訓練しかやってない他の
三人はやはり悠斗達に比べれば弱い。

「でも教えるなんてあまり出来ないぞ？ それに戦い方も変わるし
な」

「ゆう君ならできるよー」

「根性論か!?!」

そこで端末が鳴り響く。

「っ！ 今からか!？」

「ならこの話は戻ってからだな」

次に目を開けると見慣れた景色に変わっていた。

しかし、星屑の数は前回よりも多く、進化体モドキも少しいた。

「あの、若葉さんも大丈夫だろうから今回から陣形を使ってみませんか?」

「陣形?」

杏が言うには、五人をローテーションで回していき、杏は城の上から全体を見て指示と逃した奴を倒す。

最初の陣形は正面に若葉、東に友奈、西に球子、そして休憩に千景と悠斗が待機していた。

「確かに持久戦にはもってこいだな」

「なら交代のタイミングは杏に任せよう」

「え?」

「だなー。あんずならタマも安心だ」

頼られる事が少なかった杏は、思いもよらない褒め言葉に慣れていなかった。

「アンちゃんなら大丈夫!!」

「そうね……伊予島さんなら信用できるわ」

「が、頑張りましゅ! あっ!」

「そこで噛むか……」

「うう……」

杏が舌を噛み、痛がつてると友奈が提案をしてきた。

「そうだ! あれやろ! あの集まってオー!! ってやるやつ!」

「円陣か。いいな」

そう言ってみんなが集まる。

「大社が言うには四国以外でも生存の可能性があるらしい。この戦いが終わってもやる事はある。その為にも勝つぞ!!」

『オオ——!!』

正面から見たバーテックスはそれこそ無数とも見えるだろう。そして若葉はあの顔を見ると心の中から憎悪がふつふつと湧き出る。

そこへ……

「若葉ちゃん!!」

「友奈?」

「落ち着いてー! 張り切っていいー!!」

少し離れているのに若葉の心境を見抜いたかのように元気付けてくれる。

「そうだな。今はみんなの……未来の、平和の為に戦うんだ。それが亡くなった人達の為にも今生きてる人の為にもなるんだ」

若葉は生太刀を持ち、前を見る。

既に速いものはかなり近い。

迫り来る星屑を一刀両断して、若葉は高らかに叫ぶ。

「勇者達よ!! 決戦だ!!」

戦いが始まり既に三十分は経過しただろう。

「友奈さん少し下がってください! タマつち先輩! 右に神樹様の方に向かっているのがあるよ! タマつち先輩の武器なら当たる!!」

二人は言われたとおり、友奈は少し下がり、敵をよく見て殴る。球子は離れたのを楯を投げて潰す。

「的確だな。これなら消耗も減らせるか」

悠斗が呟いてると、千景は少し暗い表情をしていた。

「戦えない勇者には価値が無いって思っていないか?」

「……え?」

「凶星か? ならその答えはノーだ」

話をドンドン進めていく悠斗。千景はそれを黙って聞いていた。

「この世に価値の無い奴はいない。それに千景はもう俺らにとつちや大事で守りたい人だぞ」

「つ……貴方ってタラシって言われない?」

「ひでえ！ てか言われたことねえよ！」

それでも千景の表情は先程よりもマシになっていた。

「若葉さん！ 千景さんと交代です!!」

「いやまだ……! いや分かった!」

若葉は後ろに飛び、千景の前に立つ。

「あと少し遅かったら切ってたわよ?」

「それは怖い。……頼んだぞ千景」

若葉は手を上げ、千景もそれに合わせて手を叩く。

「ええ、任せなさい」

千景は前に飛び、敵陣へと向かう。

その姿は誰が見ても勇者にしか見えない。

「変わったな千景も」

「そういう若葉だつて変わっただろ?」

若葉の表情は今までの戦いの時よりも張り詰めていなく、むしろ余裕のある顔になっていた。

「確かに変わったのかもな」

「これで変わってないって言ったら笑うぞ?」

待機してる二人はここで良い感じに緊張や不安が拭えていた。そこで前線を見ると先程行った千景は巧みに鎌を操り、ダメージを食らうことなく流れるように戦っていた。

「綺麗な戦い方だ」

「ああ。無駄な動きが減ってるな」

武術を習う二人から見たら最初の千景は酷かったが、今まで散々練習してきたお陰で、今ではスムーズに鎌を振るっていた。

「悠斗さん、そろそろタマっち先輩と交代です」

「ん、分かった」

城の上から杏が告げる。

「んじや、行ってくるわ」

「ああ、期待してるぞ」

「あんまされても困るけどな……」

拳を合わせ悠斗を見送ると、球子が帰ってきた。

「だあ——!! 疲れたー!!」

「お疲れ球子。調子が良さそうだな」

待っていた若葉は球子に横に来るように手を招く。

そこからでも戦況はよく見えていた。

「流石杏だな。これ程までの敵は初めてだがここまで順調に進むとは……」

「そりやあんずだしな。タマはあんずならやっつけてくれると信じてたぞ！」

「それに持久戦になるならこの陣形は正解みたいだな。全く、杏には敵わないな」

思わず肩をすくめるが、戦況からは目を離さない。

目の前の悠斗は武器を剣にして敵を切り裂いていた。

「そういえば悠斗の得意な戦い方は何だろうな」

「確かに悠斗って色々使うよな。どれが本命かも分からん」

「だがあの剣さばきは相当練習しなきゃできないぞ？」

遠目から見てもその太刀筋は若葉と同じくらい上達してるのが分かる。

「なら後で聞けばいいじゃないか。勝てばいつでも聞けるだろう？ タマも気になるしな！」

「だな。その為にもこの戦いに勝つぞ」

戦う為にも今は休むことに専念する二人。

前線では悠斗がやる気を出していた。

「うおらっ！」

手には若葉の生太刀に近い大きさの長剣を持ち、星屑を両断するが、やはり剣では拳よりも手数が足りない。

「ならー！」

剣を戻し、形を変える。

長剣から短剣に変え、二つ作り上げる。

「はあっ！」

両手に短剣を持ち、脚には脚力を上げる為に鎧を付けてスピードを上げた。

それにより星屑が追いつかない速さで斬り伏せて行く。
一対複数の為、視覚を作らないように気を配り、背後からの攻撃も
躲す。

(この調子ならまだ戦える……でもそろそろ……)

「っ!!」

考えていた事が今まさに起ころうとしていた。

「悠斗さん！ その進化を防いで下さい!!」

「ああ!!」

「若葉さんは悠斗の穴埋めを！」

「承知した!!」

戦況を把握しやすい杏がすぐさま進化しようとしている塊を見つ
け、悠斗に向かわせ、その穴を若葉が塞ぐ。

これで問題が無いように思えたが……

「わわっ！ アンちゃん！ こっちもく!!」

「こっちもよ……!!」

「えっ!?!」

まさかの三方向同時に進化をしようとしていた。

杏もこれは予想出来ずに頭の中が真っ白になっていた。

そこへ同時に二つの声が聞こえた。

「『精霊を使え!!』」

その声は前方の進化をしようとしている所は向かう悠斗と穴埋め
に行った若葉だった。

「俺の方はちゃんとやっつく！ お前たちは精霊で素早く潰せ!!」

「出し惜しみはするな!! この融合を止めなくては勝てんぞ！」

若葉は既に『義経』を使っており、速度を上げて敵の数を少しでも
減らしていた。

その後真っ先に動いたのは友奈だった。

「よーし！ 来い!! 『一目連』!!」

一目連を宿し、暴風を纏った拳で目の前の星屑たちを一気に吹き飛
ばした。

「みんなも!! ちゃちゃつと済ませちゃお!!」

「……そうね。出番よ『七人御先』!!」

「だな! 『輪入道』!!」

「はい! 『雪女郎』!!」

友奈の言葉に頷き、各自も精霊を宿す。

精霊を宿せば攻撃の威力も上がり、倒すのが早くなる為、進化を防ぐには一番。

しかし、精霊のいない悠斗はこれ以上のパワーアップは出来ない。なら何をするか。

(最近じゃ頭痛なんて慣れ始めたけど、破壊衝動的なのは強くなり始めてる……でも進化を一人で止めるならこれしか無い) そう考えてると、悠斗の目の前に星屑が落ちてきた。

「止めるにはこれしかねーんだよ!!!」

悠斗は一気に足に力を溜め、解放して星屑に突進する。

それには武器を使わずに顔から突っ込んだ。

そして……

ガブリツ!!

星屑を喰らった。

その背中にあつた白い模様は広がっていき、やがて全身を覆う。頭はは出ているが、今までよりも大きめに纏われた腕や脚。しかもそれはより禍々しい気配を漂わせている。

「ウウウウ……!!」

融合の下は進んでいく悠斗に星屑は邪魔はさせないという感じで迫ってくる。

しかし……

「——!!!」

声とは言えない叫びを上げながら悠斗はその拳を振るう。それだけで十、二十。それ以上の星屑を消滅させる。

そう。死んだではなく消滅したのだ。

今までは悠斗にも意識があつた。しかし今回ののは今までとは話が違う。完全に星屑に吞まれ、ただ破壊をしている。

それ故に強い。

「!!」

しかし星屑にも多少は知能がある。

全方位からの同時突撃。

確実に悠斗を殺すために突撃してきた。

「……、……」

何かを呟くと鎧が変化する。

手には若葉の生太刀に似た刀を持ち、居合の構えを取る。

そして抜刀。

過去最速とも言える速さで周りの星屑が粉々になる。すぐに走り出すと進化体は完成間近になっている。

しかし焦っているのか、進化よりも悠斗の方に星屑を多く送ってるようにも見える。

「アアアアア!!」

叫びながら剣を振るう。しかし数には勝てない。

気がつけば肩や足には噛まれた後もあり、身体には擦り傷や砂が沢山付いていた。それでも悠斗に止まる意志は無い。

ついには進化体の下へたどり着いた。

不意に声が樹海に響く。

「悠斗!!」

「ゆう君!!」

「平気か!」

「助けるわー」

「悠斗さん!!」

若葉達が悠斗の下に追いついた。

周りを見ると進化体も星屑もここだけに集まっていた。

しかし……

「ホントに……悠斗なのか?」

若葉の言葉はその場の全員の気持ちを表していた。

事前に杏から聞いてはいたが半信半疑の状態でした。しかし現状を見れば納得するしか無い。

刹那。

「避ける!!」

「避けて!!」

若葉と友奈が同時に叫ぶ。

全員が離れると、その場所に悠斗が落ちてきた。

「きやつー」

「うわあつー」

「くっー」

ゆったりと立ち上がる悠斗。

その目に光は無く、何処か虚空を見ているようにも見えた。

「おい悠斗!! タマ達よりもあいつだろ!!」

「タマっち先輩待って!! 今話しかけたら……」

案の定悠斗は球子に向かって突撃してくる。

「球子!!」

「タマちゃん!!」

駆けつけようとするが、先程避ける時に全員が離れたのですぐには行けなかった。

「タマだっていつまでもバカじゃないんだ!!」

そう言うとう球子は進化体の方に走り、悠斗を誘導していく。だが速さが圧倒的に違う。

今の悠斗は精霊を使った球子よりも速く強い。少しの差なんてものは無いに等しい。

ならば何をすれば平気か。

「若葉——!!!」

「ああ!!」

既に動き出していた若葉が『義経』を使った状態で、音速を超える速さで球子を搔つ攫う。

そのまま進化体に向かって。

「く、ら、えええええ!!!」

動かせる右腕を上手く使い、その楯をぶん投げる。

炎を燃やして回る。進化体の群れに当たると一気に燃え広がる。

追い討ちのように悠斗も突撃。

焼け野原のように燃え上がる中、悠斗は一人で星屑を殲滅し尽くした。

星屑が消え、敵は全て居なくなった筈なのに樹海は解けない。しかし理由はわかる。

「止めるぞ」

「ああ」

「はいっ」

「うん」

「ええ」

悠斗は着々と進んでいる。若葉達勇者を狙って。

「まずは気絶させましょう。それが無理なら最悪……」

「私と千景は注意を引く。友奈と球子が頼りだ」

「分かっているよ。ゆう君は絶対助けるから」

「タマもだ。あいつはいつも通りでいいんだからな」

一步間違えれば悠斗が死ぬ。

球子だっていつも通りお気楽ではられない。

そして駆け出しは同時。

「行くぞ千景!!」

「分かってるわよっ!!」

「!!」

若葉が右、千景が左から同時に攻めると、悠斗の刀が変わり、2種類
の盾となった。

「こんな素早く!?!」

「なら……!?!」

リーチの長さと『七人御先』の数を利用して鎌を様々な角度で攻める。上、下、斜め。その場で回り、勢いをつけて鎌をぶつける。

それでも悠斗の反応速度と本能的な動きには意味を成さない。

「くう……!?! なんで!?!」

「アアッ!!」

「っあー!」

盾のまま千景に体当たりする。すかさず他の千景がカバーに入るが、その瞬間、他六体の千景が吹き飛んだ。

「ゆう君! そこまでだよ!!」

残った千景一人にトドメを刺そうとした悠斗の前に、若葉と友奈が立ち塞がる。

「そろそろ戻らないか? 戻ってみんなで楽しいことやらないか?」

「そうだよ! みんなでまたうどん食べよ? だから……!」

ズドンッ!!

二人の間を何かが通り過ぎる。しかも後ろでは樹海の根に穴が空いていた。

悠斗は既に盾から鉤爪へと変化させている。

「ッー!」

「あくまで言葉は無しか……!」

二人は説得を諦めて戦闘態勢を取る。

瞬間、その辺りの空気が揺れた。

「オオオオ!!」

「ハアアアツ!!」

「アアアアアア!!」

刀と拳と鉤爪が交わる。

数秒間でいくつもの攻撃が行き交う。友奈がワンツ一のリズムで牽制し、利き手の右を放つ。それを下がって避けると背後には若葉が『義経』で移動して既に構えており、防御が間に合わず、咄嗟に右手を捨てた。

すかさず左の鉤爪を下から上がるが、若葉の返しに抑えられる。その隙に友奈は『一目連』の暴風を使いながら悠斗を飛ばす。

「グウツッ!」

「もう休んでくれ悠斗」

そこへ球子が入り込み『輸入道』の炎を纏った楯で体当たりする。

「ゴフツ!!」

「お願い……」

七人の千景が鎌の背で上に飛ばす。

「後で解除しますから」

空中に投げ出された悠斗に杏の『雪女郎』の冷気が四肢を凍らす。

動けなくなった悠斗はそのまま落ちることしか出来なかった。

「アア……」

完全に動けない悠斗の周りに若葉達が集まる。

「すまない……」

若葉が峰打ちで悠斗を気絶させようとした瞬間、突如声が聞こえる。それも全員聞いたことのある声。

“それではつまらぬぞ”

「「「「!!」」」」

全員に鳥肌を立たせるような存在感のある声。杏は恐怖に怯えて崩れ落ちる。

“あまりにもそれではつまらぬ。せつかく手に入れた力を全開出来ぬとは面白くない”

「まさか……」

“そう。天の神である。本来ならもうちよい大人しくするが、流石に面白くないからの。余興を増やしてやろう”

何処かでニヤリと笑う天の神。

次の瞬間に少し地面が揺れる。それに悠斗の上から何か降り降っている。

「雪……？」

それは一見すればただの雪。それに杏達に害は無かった。だが。

「ガッ……！ ガアッ!!」

「悠斗!？」

「ちよつと……！ 何が!？」

苦しみ始める悠斗に声をかけ続ける若葉達。そんな中で声をかけずに、顔を青ざめている杏の姿があった。

「まさか……そんな事……」

天の神の声は聞こえないが、杏の予想は当たっているだろう。それは……

活性化

悠斗の中にあるバーテックスである部分を活性化させ、侵食を進める。このままいけば悠斗の自我は完全に消えるだろう。

(そんな事は……そんな事は絶対にさせない!! だって……悠斗さんは……!!)

これで治るなんて考えていない。それでも多少の意識があるうちにコレだけは絶対にしないと決めた。

告白

あの戦いは『丸亀城の戦い』と呼ばれ、記憶に残った。

今までにない程の敵の数。予期せぬ三体の進化体と悠斗の暴走。

そして何より勇者たちの頭に残ったのはやっぱり……

「なああんずうく、そろそろ聞かせてくれよう」

「い、嫌だよ。だって恥ずかしいし……」

球子は杏の部屋に入ってきて一緒に寝ていた。

二人は仲が良いからよくこうして一緒に寝ている時があった。

そして本日の話題。いや、最近の話題は『杏が悠斗の何処が好きな

のか』しかなかった。

「じゃあさ！　いつ告白するんだ？」

「う、それは……やっぱり目を覚ましてからかな」

そう。杏が悠斗の事が好きなのは分かるが、悠斗の返事はない。理由は簡単。何事においても強大な力にはそれ相応の対価が必要。悠

斗は今、己の中で邪なる存在のバーテックスの要素と戦っている。

前回の戦いの事は当然大社にも知られており、悠斗をどうするかで話し合っており、なんとかひなたのお陰で悠斗はまだ勇者でいられた。

「ひなたはしばらく学校は休むからなー、それに悠斗は入院中。少し物足りない感じたな」

「うん……」

杏は自分の気持ちを理解してからは悠斗の事しか考えれなかった。少し前は暇な時に一瞬気にしたりはしていたが、ここ数日は授業中を含めてずっと考えていた。

「そだ！　杏！　いつから好きになったんだ？」

「うっ、それは……」

「せめてそのくらいは教えてくれよー」

「うう……はあ。うん。分かったよ」

流石に断りすぎるのも球子に悪いと思い、出会いくらいは話すことにする。

「実はね、私は前に悠斗さんに助けられたことがあったの」

「ん？ それって勇者になる前か？」

「あれは勇者になってすぐだったよ。街に出たらみんなが殺気立ってて、私が少しぶつかっただらその人が殴りかかってきたの」

勇者が全員集められて二、三日の時のことだ。杏が散歩の為にこっそりと街に歩いてみたら街の雰囲気は最悪。誰も黙っていて、少し騒げば喧嘩。そんな日々が数日続いていた。そこで杏が高校生くらいの人にぶつかる、高校生は杏を連れてこうとしたら杏がその体を突き飛ばした為、高校生がキレて襲ってきた。

「そこで悠斗さんがその高校生の人を殴ってくれたんだ。『汚い手でその子に触るな』って」

悠斗は偶々偶然その時間に大社に呼ばれており、街を歩いていた。しかし、突然聞いたことのある声が聞こえたから見に行ってみたら杏が襲われていたのだ。

「あの時は怖くて全然好きなんて思わなかったけど……うん。やっぱりあの時だろうね」

「そういやあの時の杏の様子がおかしかったのはそんなことがあったのか」

「もうタマっち先輩には一応話したんだけど……」

「え？ マジで？」

覚えてないのも無理はない。あの時は球子達も今みたいにずっと一緒というわけではなかった。確かに仲は良い方だったが、今ほどではなかった。

「それからは少しづつ悠斗さんの事を気にかけて、最近では朝の自主練の時もこっそりとタオルとか置いといたの」

「だから最近の杏は早起きだったのか。ていうか悠斗って朝っぱらから何してんの？」

「基本的には走ってるよ？ 三週くらい」

「三!？」

球子はそりゃあの体力も納得だと理解できた。

「だから……早く起きて欲しいな……」

「杏にここまで惚れさせたんなら起きて責任を取らさなきゃな」

球子はニシシと笑いながら杏に言う。杏もその言葉に笑い、夜を眠った。

その次の日の夕方、悠斗は目を覚ました。

その事には誰もが喜んでいた。

そしてある程度の事を悠斗に話す。それで落ち込んではいたが、すぐに謝り、誓った。

そこで、杏が悠斗の前に立つ。

「杏？」

「悠斗さん。貴方が好きです。私と付き合ってください」

優しい目で悠斗を見る。その目の奥にはしっかりと決意が見える。

そんな目を見た悠斗の答えは既に決まっていた。

「ああ、いいよ杏。付き合おう」

「〜!!」

その言葉に杏は我慢出来ずに悠斗に泣きついた。悠斗もそんな杏をしつかりと抱きしめていた。

そしてそんな光景を目の前にしていた他の者はどうと……

「良かったですね〜杏さん」

「ああ、めでたいな今日は」

「悠斗ー！ 杏を泣かせたらタマが許さんぞー！」

「アンちゃんおめでとー!!」

「よかったわね。伊予島さん」

誰もがここを病室とは忘れて祝っていた。

数分してようやく落ち着くと、ひなたが大事な話をしてくる。なんでも、悠斗の処遇と今後のことだそうさ。

「まずは悠斗さんの処遇ですが、大社の上層部の大半は処分を望んでるそうです。ですが……」

「それは私たちでどうにかした。私たちだけでは今後の戦いでは不安だ。それに……」

若葉はチラリと杏の方を見る。

「この二人を離すなんて私は許さないしな」

「まあ、こちらから圧力をかけて処分は無しにさせました。それで次ですが……」

「何か言いづらいこと？」

「口ごもるひなたに千景が尋ねると、ひなたはしばらくして頷いた。

「これはかなり厳しいことです。前々からあった壁の外の調査を頼まれました。ですが内容によると、目的地は『諏訪』でしたが、その道中のバーテックスを出来るだけ排除出来ないか、ということですよ」

これについては勇者の同意が必要だ。諏訪に行く距離はかなりあるため、敵の数も侮れない。

「正直私は反対だな。諏訪まで最短で行き、すぐにでも帰るべきだ」

「でもそれって可能な限り移動に時間を回して生き残りは探さない訳でしょ？ それは……」

「俺も若葉に賛成だ。かなりハツキリ言う一般人が生きてる可能性はほぼ無い。なら諏訪へ行き、帰るでいいだろう？」

友奈の考えは悠斗にも否定された。

ちなみに何故諏訪が目的地かという点、ついこの間までは持つており、連絡が取れないだけなら生存者も多いと踏んだからだ。

「タマ的にも若葉の意見だなく。でも少しくらいなら探してもいいんじゃないか？」

「そうですね……負担になるかもしれませんが速さがある悠斗さんはその町を軽く一周してみるくらいなら……」

「なら私の『義経』や数の多い『七人御先』で探した方が……」

「いえ、精霊を使うのは控えるべきです。前の戦いで使いましたが何かあるかもしれないので」

「なら悠斗くんは？ 彼の暴走は……」

当然の疑い。

前の戦いの様に暴走されたら困るのはみんな同じだった。

「それはまだ予想ですが平気です。おそらくまた星屑を喰らえば分かりませんが……」

チラリと悠斗を見ると、悠斗はスツと目を逸らした。

「悠斗さん？ もうあんな真似はさせませんからね!？」

「分かってるよ。流石にあれは嫌だ。あと近い……」

今にも唇がくつつくくらい顔が近かったが、気を取り直して話を戻す。

「なら戦闘は最低限。探索少々、移動は迅速にどうだ？」

「……まあ、それなら平気だろう」

結局、悠斗の出した案で遠征に行く事になった。

「じゃあ、私たちは帰ろう。杏はもう少し悠斗を見てやれ」

「へ？」

「そうですね……杏さん、よろしくお願いしますね？」

「ええ??」

「まったねー!」

「じゃあなー!」

「また……」

まるで嵐の様に全員が消えた。

その病室には悠斗と杏の二人となった。

そこで、杏が提案してくる。

「悠斗さん、治ったら少し技を考えませんか？」

「技？」

「暴走した悠斗さんは先程言った通り、武装の切り替えを瞬時にやっ
てました。なら悠斗さんにも出来るのでは？」

あの時の悠斗の切り替えは速すぎた。今までは少なくとも五秒以上はかかっていたが、あの時は三秒あるかないかだ。それに見たこと
ない盾にもなっていた。

「でもそれは暴走の可能性も……」

「出来ないなら練習すればいいじゃないですか。私がずっと一緒に手
伝いますよ。それに……」

「それに？」

ほんの少しだけ悲しい表情の杏は悠斗の方を見て話す。

「わ、私は守られるだけは嫌なんです！ 悠斗さんの力になりたいん

です!!」

悠斗の手をギュツと握りしめ、泣きながら杏は悠斗に言う。悠斗は呆気を取られたが、すぐに杏の頭を撫でながら言う。

「俺は杏に助けられてるよ。今回の暴走だって、戦いの時によく助けられたよ」

最初の戦いでも隙を作ってしまった悠斗を助ける形で杏はサポートしたりして、ずっと誰よりも悠斗を支えてきた。

「だから泣かないで。俺も弱気になった。やるよ。あの状態を物にしてみんなを……杏を守るよ」

「ぐすっ、悠斗さん……」

「だから退院したら頑張ろうな?」

「はいっ」

二人は窓から見える沈む夕日をバックにキスをした。

これから激しくなる戦いで、仲間を、互いに守る事を誓って。